
流浪の民

仲 夏月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流浪の民

【Nコード】

N2015N

【作者名】

仲 夏月

【あらすじ】

修道院育ちのリオンは、ある日の夜、窓から部屋に飛び込んできた闖入者を迎えた。ルドルフと名乗る少年は、リオンのお人よしぶりをみぬくや、さっそく相部屋を申し出るなど、面倒事を持ち込んできそうな様子だが・・・？

たとえ過酷な運命が待ち構えていようとも、自らの意思を貫いて生き抜くことを決意した少年の流浪の軌跡の物語。現在改稿中です。

第1話

修道院の庭には、きらきらと日の光を受けた野菜たちが先ほどたっぷりと湿らせた地面から勢い良く水を吸い上げている。

小鳥のがさえずり、木々がさわさわとおしゃべりを始める。

穏やかで、静かな午前中のはずである。

「やめろって！」

ざわざわと喧騒があたりの静けさを壊す。悲鳴にも似た声木陰の間から空へ突き刺さる。

そろいのローブに身を包んだ少年たちがわいのわいのと騒いでいる。

喧騒の中央で、ひとつに束ねられた金髪がゆらりと揺れて、ついでがつんと音が響いた。

うっとその下で首を押さえられた少年が鼻から血を出してうめき声を上げる。

金髪の方の少年が無表情でもう一度こぶしを振り上げる。その腕を数人の少年たちが抑える。

「いい加減にしろって！」

「院長先生だ！院長先生が来たぞ！」

少年たちは、その声で蜘蛛の子を散らしたようにその場を離れていく。

「何をしているんです!」

黒い僧衣の男の声に、金髪の少年はようやく顔を上げた。

「……ゲーゼルヴァインド君、一体何があったのですか?」
「リオンと呼んでください。院長先生。」

つんとした声に、やや老いを感じさせる口元からふうと息が吐き出された。

「いいでしょう。リオン。・・喧嘩の原因は一体なんですか?」
院内で喧嘩は禁止だということはご存知のはずでしょう。聞けば、貴方がいきなり殴りかったという話ではないですか。」
「……言いたくありません。」

細い線で描かれた首から飛び出た声は、声変わりでやや裏返って聞こえる。やや薄い頭をそっとなでて、院長はふうとため息をつい

た。

「お母上のことで何か気に障ることも言われましたか？」
「……………」

殴り合いの結果、腫れた口の端を手の甲でそっと押さえるも、少年はそっぽを向いたままだんまりを決め込んだ。

「…………こんなことでは、お父上のゲーゼルヴァインド卿に一度こちらにきていただかなければなりませんよ？」
「呼んだところで……………」

そこで、少年がようやく口を開いた、自嘲気味に口の端を吊り上げる。

「俺がここで何をしても、あの人がくるはずありませんよ。俺の顔なんか見たくないんですから。」
「ご自分の父上のことを“あの人”などというものではありません。それになんですか。“俺”などと粗野な口の利き方は。良家の御令息の言うせりふではありませんよ？」

院長の隣で、まだ若い神父がたしなめると、少年は、くっと笑みを漏らす。

「俺はあの人の子ではありませんから。“良家の令息”云々など俺には不相応です。」
「……………」

司教が黙ると、院長はもういいでしょうと少年を促した。

「部屋に戻ってよろしい。一晚反省なさい。」

“私の子ではない”

自分が生まれたとき、父はそう言い放ったそうだ。

母は、生まれた自分を見て、半狂乱になったらしい。

それはそうだろう。

黒髪黒瞳の男と、鳶色の髪に青い瞳の女から金髪で緑碧の瞳の子が生まれることはまず無い。

祖父母をはじめ、親類縁者にもそういった特徴を持つ者が居なかったから、母の不義が白日の下にさらされたわけだ。

それ以来、父親は母を遠ざけ、家では使用人あがりの愛人が大きな顔でのさばっていた。

歳の離れた兄は母をなじり、弟である自分を疎んじて、王都にある屋敷に移ってしまい、領地の屋敷にはめったなことでは顔を出す

ことは無かった。

母は、悲嘆にくれるあまり床についてしまい、長年寝たり起きたりの生活を繰り返したあと、彼が5歳の冬に亡くなった。

結局。自分が誰の子かは一言も口にしないままであった。

口さがない使用人たちの噂話では、王都の屋敷に住んでいた頃に時折通っていた伯爵夫人のサロンがあったそうだから、大方そこで知り合ったどこぞの貴族だろう、ということらしい。長ずるにつれ、「父でも母でもない他の誰か」に似てくるその子供の涼やかに切れた眦や、やや淡い金色の髪は、使用人の間でも無遠慮な視線の的であった。

そんな彼を、父は母がなくなってすぐにこの修道院に預けた。

以来数年、父はこちらに顔を見せるどころか手紙の一つもよこさない。リオンが修道院を追い出されていないあたりから察するに、おそらく必要最低限の事務処理はきちんと行われているのであろうということが分かる程度だ。

そこで放られるように入れられた修道院も、彼にとっては状況を好転させる場所ではなかった。

事情が事情だけに彼の素性は巧妙に隠されているはずだったが、どこで話が漏れたのか、この修道院で生活する少年たちには数日のうちに知れ渡っていた。

遠巻きでひそひそと交わされ、視線だけがやけに痛いほどに感じられるその状況は、屋敷と寸分もたがわず、むしろあからさまな分が余計に彼に突き刺さって感じられた。

表では平生を装っているが、中には悪意に満ちた言葉を投げかけ

るものもいる。

“お前の母は何処の娼婦だ？”

昼間、ぼそりと耳打ちされた言葉に、かっと頭に血が上ってしまい、思わず手が出たのである。

「畜生。」

机をがん、とたたいて、リオンはつぶやいた。

「畜生っ。」

そのとき。がんがんと窓が音を立てる。

何事かと顔を窓に向けた直後、リオンはひっと声を上げた。

「な、な、なんだ？」

「おい。おい。ここ開けてくれよう。」

がんと扉をたたいている顔が逆さまに見える。

リオンは慌てて窓を開けた。その窓からリオンより年上らしい少年が部屋にすりと入りこんできた。

「助かった。部屋抜け出してどこかにいけるかとおもったら、真っ暗で街の明かりなんて全然見えねえんだもん。聞こえるのは虫の声だけで、おまけにみんなさっさと寝やがったのか部屋の明かりも見えないしさ。真っ暗の中、壁伝いに移動したら、そのうち足踏み外して落ちるんじゃないかとおもった。よかった、まだおきてる奴いて。」

「抜け出さって・・・今、一体何時だと思ってるんだ。消灯時間はずっとくに過ぎてるぞ?」

窓からの闖入者に、リオンは目を丸くする。

銀髪に青い目の少年は白い僧衣を軽くたたいて埃を払うとからからを笑いながら頭をたたいた。

「あんまり暇だしさ。抜け出して街で女引っ掛けにでもいこうかなとおもって。だけど、ここってどれだけ田舎なんだよ。ほんと、何にもねえのな。」

あつけらかんとしたせりふに、リオンは顔を真っ赤にした。

「神職にあるものにあるまじき行為だぞ！」

「・・・・・・・・・・はあ？」

一瞬、きよとんと目を見開いた少年は。
続いて腹を抱えて笑い転げた。

「うわー！。何そのお題目。・・・・まあ、お前みたいな子供
だったら女を知らないのも道理かな。」

「な・・・・・・・・・・！！！」

耳を真っ赤にして、次の言を告げないリオンに少年は銀髪を掻き
ながら笑う。

「うわー。修道院以外知らない坊主の典型的反応。」

「だ、大体、お前何者なんだよ？」

なんとか平生を保とうと努力するが、いかんせん変声期の声は不
安定だ。

声が裏返り、軽く咳き込んだリオンに、相手はへへっと屈託無い
笑顔を見せる。

「俺？ ルド。ルドルフ・フォン・・・・って、あれ。何だっけ。」

「家の名前もいえないのか？」

「しかたねえだろ？ 最近、その家の奴になったんだからさあ。」

予想外の言葉に、リオンは目を丸くした。

「最近？」

「ああ。俺、愛人の子。まあ、所謂“庶子”ってやつ。嫡子がはやり病で死んじまってさあ。他に跡継ぎも居ないっていうことで俺にお鉢が回ってきたってとこだな。」

聞けば、この修道院から随分遠くに位置する国の侯爵家の子息らしい。

「なぜ、修道院に？」

「生まれ育ちが街中でさ。行儀がなってないっていうことで行儀見習いで放り込まれた。まあ、しばらくここにおとなしくさせておいて、ころあいを見て“実は幼い頃に修道院へ入っていた男子が居て”とかなんとか言って王都に戻して辻褄を合わせるって魂胆だろうな。俺の事はルドでいいぞ。歳は17だ。お前、名前は？歳は幾つだ？」

リオンはやや齒切れ悪く告げた。

「13歳になったばかりだよ。皆にはリオンって呼ばれている。」

「呼ばれている？・・・ってどういうことだ？」

「俺・・・魔力あるから。本名はめったなことでは口にするなって言われてる。生まれた時に街の魔術師に真名とは別にリオンって呼び名をつけられた。」

「なんだ。魔法使いか。それでも、家の名前くらいはあるんだろう？」

「・・・・・・。」

そこで、リオンは口を噤んだ。その様子に、ルドルフは額をたたく。

「……まずいこと聞いたか？」

「……うん。ゲーゼルヴァインドって家だよ。……もつとも。父上の本当の子ではないから、その名前が家の名前だと言えるかは俺にもわからない。」

「なんだ、俺と大してかわんねえな。それで家の名前口にしたくないんだ。」

ぽんぽんと容赦ない言葉ではあるが、悪気は感じられない。

「……立ったままもなんだから、そこに座りなよ。ここは俺一人だから誰か来ることもないし。」

「お？　そうか？　悪いなあ。」

リオンは、相手に向いのベッドを進めると、自らも腰掛けた。

「適当なところで自分の部屋に戻ったら？　ここは山の奥で君が行き慣れているような街はないし、消灯時刻過ぎてあちこちうろうろしているのを神父に見とがめられたらお目玉だよ。」

「じゃあねえな。そうするかあ……。つと、なんか騒がしいな。」

「??」

がたがたと廊下が騒がしい。

耳を澄ましてみれば、修道院の師父たちのあせった声がはじめはひっそりと、だがやがてどうしようもなく大きな声が聞こえてきた。

「何があったのかな？」

リオンは、そつと扉を開け、廊下を覗くように顔を差し入れる。

「あつ。」

神父の一人と目があう。リオンに気がついた彼が慌てて此方に駆け寄ってきた。

「ゲーゼルヴァインド君。まだおきていたのですか？」

「少し経典を読んできましたので。・・・何か起きたのですか？」

「君には関係ないから。心配せずにもう休みなさい。明日も早い。」
「へえ、何か騒ぎ？」

リオンの背後から少年がひょっこりと顔を出した。

「あ、おいつ。」

「え・・・あああつ！！！！ どうして貴方がここに居るんです！」

神父は悲鳴を上げた。

「ご子息！ どうしてこんなところに！ 探しましたよ！」

神父の、その表情で、リオンはがっくりと首をうなだれた。

「騒ぎの原因は、君じゃないか。」

そのまま、院長室まで二人は連行された。

今回は、完全にいい迷惑だ。

リオンはなにやら力が抜けてしまって、げんなりとした表情で院長の説教を聞いている。

「どうして、客間を抜け出して、ゲーゼルヴァインド君の部屋に居たりしたのですか？」

院長の言葉に、リオンの隣で立つルドルフはえーつとと苦笑いを見せる。

本音を言えばまずいに決まっている。
入って早々独居房行きだ。

リオンは、はあっと息をついた。

「院長先生。彼は、慣れない修道院で、手水に出られたまま少し迷ってしまわれたそうです。ちょうど、俺の部屋の近くを歩いてい

らっしゃったので、お茶でも如何ですかとお誘いしたところでした。」

「・・・リオン。そういう場合は、誰かに報告して、お部屋にご案内するのが筋ですよ。侯爵家のご子息に何かあってはと私たちは気をもんでいたのですから。」

「申し訳ありません。見かけないお顔でしたので。少しお話を伺いたかったのです。」

きよとん、とリオンの顔を見つめる視線を無視して、リオンはすまし顔でそう告げ、頭を下げた。

「ご子息。彼の言うことに間違いはありませんか？」

「え・・・あ・・・。いいえっ。本当です。ご心配かけてすみません、迷って困っていたところをゲールヴァインド君に声をかけていただいたのでホッとしたところでした。」

銀髪の少年もぺこんと頭を下げる。

その様子に、院長はまあ、今回は良いでしょうと息をついた。

「それなら、よろしい。二人とも、部屋に戻りなさい。」

やっと開放か。

リオンが肩の力を抜いたところで、そつと隣の少年が手を上げた。

「あの・・・俺、まだ部屋が決まってないんですよね？」

「え・・・？ ええ。そうですよ。しばらく客間で暮らしていただい

て二三日のうちに正式なお部屋を用意させていただきますが。」

院長の隣に立つ司教の言葉に、銀髪の少年は青い瞳を人懐っこく細めた。

「俺・・・私はゲールヴァインド君と相部屋がいいです。先ほど見たところ、彼の部屋は本来二人部屋なのですが・・・？」

「しかし、侯爵家のご子息の貴方を相部屋なんて・・・。」

「駄目ですか？ この生活に慣れるにはどなたかと相部屋のほうがいろいろと聞けて心強いと思いますし、それに、ここではそもそも身分など関係がないと伺っていますか？」

「それは・・・。」

今度は、リオンが目を丸くする番である。

「・・・お、おい・・・。」

「そうですね。ここでの生活になじむには誰かと相部屋のほうが良い。ゲールヴァインド君も子爵家の令息ですから、侯爵もとやかくは仰らないでしょう。」

「院長先生！」

「・・・リオン。なにか異議はあるかね？」

異議だらけだとリオンは思う。

思ったが、あまりこちらの意向など聞いてくれそうな雰囲気ではなかった

「わかりました。」

「では、お部屋は明日にもで整えましょう。」

「ありがとうございます！」

今まで、のんびり一人部屋だったのに。

よりによって、トラブル・メーカー間違いなしのこいつと相部屋かよ！

がっくりと肩をおとしリオンと対照的にこやかなルドルフ。
院長室を出たあと、がっしりと肩を引き寄せられた。

「まっ。これからよろしくな？ リオン。」

「どうして、相部屋なんていうんだよ！？」

「え？ お前、お人よしぽいから。」

むっかあと顔を赤くしたりオンの鼻をぺしんと弾いて、ルドルフは二三歩先にすすむと片手を挙げた。

「じゃあ、明日からよろしく！」

第2話

次の日から、ルドルフという名の少年はリオンと同室になった。結果。新人の世話係というか、なにかと面倒を見るはめになるのはリオンである。

ルドルフは、表向き品行方正そのものである。

言葉遣いも実にそつがない。

ただ、生来の育ちのためか、ちよつとした作法や行儀に戸惑うことがあるらしい。そんなときは少々フォローをしてやると、もともと飲み込みのいい少年は対面を取り繕うには問題が無かった。

まあ、部屋に戻ればやんちゃな少年そのものではあったが。

外面の良さにかけては天下一品だよとリオンはため息をついている。

リオンを選んだのはルドルフの人を見る目が良かったのか悪かったのか。お人よしのリオンはつついルドルフのフォローやらなだめ役やら勉強の相談役やらで、鬱屈したことを考える間もない。

そうやって、一月ほどもすれば、リオンとルドルフの妙な組み合わせはそれなりに定着し、修道院の師父達もルドルフのことについてはリオンに聞くことが常となっていた。

少年たちの中には修道士や神官として神職に就くものもいるが、ルドルフのように実家に帰ることが前提の者もいる。

修道院と寄宿学校の中間のような施設であるここでは少年たちは一般的な教養や神学もさることながら、魔法や武術等も学ぶことになる。

「俺、勉強ってあんまり好きじゃないんだよなあ。町に居たときも少しは読み書きやったけど。それに、なんか修道院って辛気臭せえ……。息が詰まる。」

「つべこべ文句言うんだったら、侯爵家の嫡子なんか辞めて、さっさと町に戻ればいいだろ。」

昼食後の休憩中、庭の芝生の上で神学書のページをめくりながらため息をついたルドルフにリオンは皮肉めいたセリフを吐いた。いつもならばへえへえと流すだけのルドルフだが、この時ばかりは立てた膝にひじをつけて目配せをする。

「ところが、そうはいかねえんだな。俺がちゃんと嫡子様をやつてのけたら、母さんに楽させてやれるし。」

「母上？」

顔を上げたりオンに、ややばつの悪そうな顔でルドルフは笑みをこぼした。

「俺を生んじまったから。まともに結婚もできないでさ。女手一人で俺を育ててくれたんだ。だから、嫡子の話が来たときは、真っ先に“母さんに楽をさせてやれる”って思っ飛びついちゃった。まあ……。その分の苦労はかなり覚悟だけだな。何せ、義母上……。正妻がいい顔してなくて。まあ、当たり前だけど。」

「そっか……。ごめん。」

急に、しゅんと顔色を暗くしたりオンに、逆にルドルフが慌てる。

「なんでリオンが謝るんだよ。」

「あんまり事情知らないのに、さっさと町に帰れって。」

「あほか。お前どれだけお人よしなんだよ。ツンケンした澄まし顔のくせに、中身はとんだ甘ちゃんなんだよな。俺が愚痴れば毎回毎回、くそ真面目になだめるしさ。・・わざと愚痴りたくなるじゃねえか。」

そのまま、しばらく黙り込んで神学書をめくっていたルドルフは、そっとリオンの肩を押した。

「何？」

「お前さ、母親が他所の男と不倫して出来た子だって？」

「な・・・・。」

絶句のあまり、口を開けっ放しのリオンの顔にルドルフは本当かあと納得顔で頬杖をついた。

「俺、てっきり母親が再婚でその連れ子とか、そういうのかと思ってたけど。・・・・すっげーヤヤコシイんだな。俺の比じゃねえや。で、本当の父親って知ってるの？」

「君には関係無いだろ。・・第一、一体誰から・・。」

「だって、お前自分のこと何にもいわねえんだもん。それに・・。」

視線で示した先には4、5人程の少年たちの集団がいる。ひときわ身のこなしもすっきりとしているそれなりに身分のありそうな集団である。

「こっちが知ろうと思わなくても、勝手にあれこれしゃべってくる奴ってのは何処にでもいるもんだ。」

「ああ・・・・。彼らか。」

時折、じつとこちらを見つめる視線が嘲りであったり、侮蔑であったり、さまざまである。

リオンは気にしてないよと手元の魔術書に目を落とした。

「俺がここに来た頃、あの中央にいる奴の誘い断ったんだ。なんでも、有力な富豪の息子とかで、将来は大聖堂の大神官だって噂だよ。俺に、子爵家の令息なら、私たちと共にいるのが筋だとか何とか言ってるさ。どうも取り巻きの誘いだったみたいだけど。俺、面倒くさかったから・・・」

「誘いをあつさり蹴ったら、目をつけられたってことか。」

「そうなんじゃない？ 何かにつけ突っかかってくるからさ、大体放っておいたけど。この間、いい加減頭にきて一人ぶん殴った。」

ぷつとルドルフが吹き出すのがわかった。

「お前、平静な顔していきなり何やるかわかんねえな。」

「笑いごとにするなよ。」

「・・・これはこれは、侯爵家の子息様。ご機嫌麗しく恐悦至極に存じます。」

急に、声が振ってきた。二人が顔を上げると、先ほどまで遠くに居た少年たちが目の前に立っている。その場をはずそうと腰を浮かせたリオンの腕をがしつとつかんでルドルフは制した。

「何のようで？」

「いえ、侯爵家のご子息ともあろうお方にはもっとふさわしい場所というものがあると、お教えしようと思ったまですよ。」

「へえ・・・。」

立ち上がろうともしない侯爵家の子息を見下ろしたものと、取り巻きの数人が動揺するが、中央の少年は、うっすらを笑みを浮かべたまま、腰を下ろそうともしない。

「彼より、我等とともにあるのが、筋では？ 失礼ながら、不貞の息子が世話係では、貴方に傷がつきましよう。」

「私は、ゲーゼルヴァインド君で不足はありませんが。失礼ながら・・・。」

にっこりと笑みをこぼして、人懐っこく、ルドルフは肩をすくめた。

「ここでは身分など関係ないと伺っています。己の才覚で得たわけでもない“お父上”の権威をかさにきて、口さがなく他人の噂話に花を咲かせる程に己の品位を下げるということをご存じない方々と共に行動しては、わたしは“侯爵”に申し訳が立ちませんのでね。」

「・・・お、おい・・・。」

無理に腕をつかまれて、リオンは立たせられた。そのままその集団に背を向けさせられる。

「それでは、失礼。わたしは勉強があるので。リオン君、神学書でわからないことがあるので少し教えてくれないか。魔術書と神学書の中身についてはどの教授より君に聞くのが一番だからな・・・・身分身分という暇があったら、勉強に励まなければ“侯爵”を失望させてしまうよ。」

舌打ちや、くっという声を背にして、リオンとルドルフはその場

を立ち去ろうとする。

「所詮、同じ穴の貉か。」

ふっと、耳に届いた言葉に、リオンは足を止めた。

「“愛人の子”には“不倫の子”が丁度いいとは、言িয়েて妙。折角、箔をつけて差し上げようと親切心を出したがあだになったな。どうせ、侯爵の嫡子の座とて、財産に目がくらんだのだろうよ。・・・御国元でぼろが出ぬようにせいぜい励まれよ。」

氣にするな、とでも言うかのようにリオンの腕が強く引っ張られる。リオンの至極無表情な顔色とは対照的にこぶしがきつく握り締められている。

「行こうか。行儀もままならぬ下劣な匹夫には、娼婦の子供がふさわしい。」

声が、遠ざかる。

その遠ざかる気配に、ルドルフが力を緩めた瞬間である。

「リオン！」

駆け寄って、おもむろにリオンは少年のわき腹を足蹴にした。
不意をつかれて、少年がその場に転がる。

「何をするんだ！」

助け起こそうと二三人が近寄った足元から、しゅいんと蒼い光が
立ち上る。

「！！」

「魔法・・・」

横たわる少年を囲むように薄く蒼い炎が円陣で取り囲んだ。

「やめろ！ リオン！」

「誰か院長先生呼んで来い！」

ざわざわと少年達が集まってくるその中央で、腰の抜けた少年は、
がくがくとあごを鳴らす。

それを見下ろす、金髪の少年のやや釣った瞳は半眼に閉じられて

もなお、怒気を含んでいる。

「・・・蒼炎・・・その灼熱の刃・・・。」
「やめろ・・・やめてくれ！」

少年の懇願むなしく、蒼い炎がじりりと円陣を狭める。

「リオン！」

リオンの体が吹っ飛んだ。その瞬間、蒼い炎が綺麗に消え去る。

「この馬鹿。やりすぎだ！」

ルドルフの声が荒々しく耳に届いて。

リオンはくらくらとその場に崩れた。

第3話

寄宿舍脇に立てられている細い塔が独居房だった。

三日間、そこで謹慎するように告げられた。

むしろ、謹慎程度で済んだことが嘘のようである。

魔法で火達磨にされかけた少年がリオンを追い出せと院長に詰め寄ったらしい。

そこをルドルフが擁護したようだ。

「そも。発端は彼の無礼な言葉によるものです。あんな失礼なことを言われて、今まで黙っていたゲーゼルヴァインド君の心中を察します。彼を御処断なさるなら、俺はここには居られませんね。父に話して修道院を移していただきます。・・・もつとも、詳しい経緯を父には説明しなければなりません。」

「それは・・・。」

「この修道院の中で身分に関わらず人と付き合い、勉学に励むようにと父に得々と言われてまいりましたが、こう権威を振りかざす人々の間では勉学どころではありません。」

「・・・ご子息。」

戻りかけた意識の中でそんな会話を聞く。

相変わらず、外面のいい奴だと思いながらまた意識の深いところへ引きずり込まれていた。

「・・・独居房って、静かだなあ・・・。」

壁の高いところにぽっかり開けられた窓から見える月を見つめて、リオンはつぶやいた。そのつぶやきさえ、こだまとなって壁から跳ね返ってくる。

「最近、ルドが居るから、毎日騒がしかった。」

一人が、こんなに静かだと思わなかったのは久々に一人きりで過ごす夜だからだろうか。

いつもなら、ルドルフの話に付き合って、腹を抱えて笑って、ぶつぶつと不満を言うのをなだめて、作文の綴りをチェックしてやって・・・忙しいはずなのに。

・・・リオン。感情のままに力を振るってはいけません。魔力に頼り、その力を制御できないようでは、これから先もつと苦しむことになりますよ。一人でよく考えなさい

独居房に入れられる前に、院長から告げられた言葉をもう一度か

み締める。

立てた膝に顔をうずめて、少年は膝を抱えた。

しばらく、そのままじりとも動かないでいると。がちやがちやと鉄の扉が動くのがわかる。独居房の格子の向こうの小部屋の扉が動いて、銀髪の少年がひょっこりと現れた。

「リオン。腹減ったか？」

「ルド？ どうしたんだよ？」

「食事もっていかせてくれて頼んだんだ。下の看守さんにもちゃーんと許可取ってるから。俺の分も持ってきたから、一緒に食べようや。」

籠を片手ににっこりと笑って、ルドルフはつかつかと石の床の音を鳴らす。そのまま、格子越しに背を向けてすわった。

「いいのかよ。まさか勝手に抜け出してきたんじゃないんだろうな？」

「大丈夫だって。院長にもちゃんと言ってるし。」

そういうながら、パンをひとつ渡す。下の隙間から、トレイに乗せた深皿に入ったスープもよこしてきた。

「さて、今日も感謝して、頂きます。……ちゃんといわねえと、お前怒るからな。」

「……いない。」

パンをトレイにおいて、リオンは膝を抱えて格子に寄りかかる。格子をはさんで、背中が温かい。

パンを口の中に放り込み、咀嚼しながら、ルドルフはそうだと背中越しにリオンを一瞥する。

「お前さ、魔術得意なんだな。あんな炎見たこと無かった。」

「・・・魔術師なんじゃないかって、噂してる奴がいた。」

「何が？」

「俺の本当の父親。・・・宮殿に出入りする魔術師の誰かじゃないかって、それとも、大聖堂の神官かもとも・・・俺に聞かれて無いと思っけて好き放題言っけた。」

ふうん・・・。

ルドルフがスープをすすする音が聞こえてくる。ふわんと暖かい匂いが鼻を通る。

「修道院の食事ってのも、慣れれば美味しいもんだなあ・・・。」

「ルド、ごめん。」

「何が？」

「記憶半分なんだけど。俺の事かばってくれてたの聞こえたから。」

顔を横に、床に話しかけるようにつぶやくリオンに、気にするなよとルドルフは笑う。

「ありゃ、ちっとやりすぎだけだな。・・・お前、俺の代わりに怒ってくれたんだな。ありがとう。」

「そんな、いい話じゃないよ。」

「・・・お前さ、ひょっとして騒ぎ起こせば父親が来るとでも思ってるの？」

「・・・。」

背中を格子からはずして、ルドルフの背中を見つめる。銀髪の少年の背中には、身じろぎもしない。

「・・・何したって、来ないよ。」

「否定はしないんだな。」

そのまま、沈黙が流れる。リオンは、また格子に背中を預けた。

また、ルドルフはほつりと聞いた。

「誰かに、止めて欲しいのか？」

「・・・わからないんだ。」

リオンは、膝を抱えたまま、壁に向かって返事をした。

「俺、父上が嫌いなのかそうでないのか、わからないんだ。ただ、俺が何したって、父上には届かないだろうし。それなら、何したっておんなじだって、そう思うと力が止まらない。」

「ふうん・・・。」

また、しばらくの沈黙が流れる。

「じゃあ、俺が止めてやるよ。」
「え・・・？」

顔を上げ、格子の向こうの背中を見つめる。

「ほら、俺もなんだ。将来侯爵になるとかいいう男だしさ、度々ぶち切れて暴走する奴を友達に持つってのもなんだか困るしさあ。」
「・・・暴走って・・・。」

ぷつと吹き出したリオンの目の端にパンが差し出される。

「いきなりぶん殴る前に言いたいこと言えよ？　俺みたいにスマートに、知性漂う物腰で、なっ？　・・・お前が言われっぱなしだから、相手が図に乗るんだよ。」

「・・・何が知的に、だよ。」

パンを受け取る。

格子に背を預けて、一口パンを口にしかけたところで、ルドルフの声が響いた。

「それからさ、あの取り巻き以外の連中・・・あいつらに相手にされてない奴らの中には結構お前の味方居るみたいだぞ？　・・・そういうの、ちゃんと見ろよ。お前が寄せ付けないから、誰も近寄ってこないんだからな。」

「・・・う、うん。」

「早く独居房からでろよ？　俺の小論文、誰が綴り見るんだよ。」
「・・・自分で辞書引けよ。四つも年下の俺に何時までも綴りなおされてるんじゃ“侯爵”になっても先が思いやられる。」
「おまえなあ。そういうの生意気って言うんだぞ。」

ちょっと嫌そうな声が聞こえて。リオンは思わず笑みをこぼした。
くすつと笑いながらかみ締めたパンは。

いつもより塩味が強かった。

第4話

井戸の水は冷たくて、袖をまくってむき出しになった腕をぴりつと刺激する。

「リオンー！ー。」

「リオンっ、何してるのー？」

「何してるのー？」

「わーっ。井戸は危ないから来るんじゃないっていつも言ってるだろう！？」

甲高い声を割るように、朗々とした響きが空気を震わせる。

白い僧服にしがみつき、甲高い声を上げていた子供がきやあきやあと四方に走っていく。

「リオンこわーい。」

「リオンが怒ったー！」

「リオンー。早く本読んでー。」

「魔法見せてー！」

「楽器教えてー！」

「わかったからっ。わかったからおとなしく待ってろって！」

水を大きな甕に移しながら、子供達に声をかける。

そのまだ細い背中に、穏やかな声かけられた。

「リオン。今日もよい天気ですね。」

「あ……、院長先生。おはようございます!」

院長の穏やかな声に、少年の綺麗な声が明るく響く。

「……仕事は性にあってるようだね。」

「あ、はい……楽しいです。」

「施療院の医師もほめていましたよ。」

「あまりほめないでください。図に乗りますよ?」

くすくすと屈託無い笑顔に、しわがれた指が細い封筒を差し出した。

「侯爵からお手紙ですよ。」

「ルドから!? ありがとうございます。」

ぱっと顔を輝かせて、手紙を受け取る。院長は軽く手をあげるときびすを返す。

「それでは、午後の礼拝で。」

「はい。」

ぺこんとお辞儀をするその姿を見て院長は微笑みながら背をむけた。

「……リオンに施療院と孤児院の手伝いをさせたのは正解でしたね。めっきり落ち着いて……あれから、魔力の暴走もみられま

せんし。」

「精神的に不安定になると力が暴走しがちでしたからね。もう15歳ですか。随分と大人びたものです。年下の修道士達の面倒も良く見てますし。」

司教たちの言葉に、院長は頷いた。

「雑音が気にならなくなったためですよ。今、誰が彼に何を言っても、リオンはそれで己を見失うことは無い。」

「リオンー。お手紙なあに？」

「あ、わかったー。こうしゃくさまだーー。」

「侯爵様、今度いつ来るの？ 御菓子持ってきてくださる？」

「うーん。侯爵は忙しいんだって。今度、東方王国の珍しい絵本をいくつか贈ってくださるそうだよ。」

階段で手紙を広げている背中に飛びついて子供達が手元を覗き込む。

「本当？ 楽しみ。リオン、読んでくれる？」

「ちゃんという子にしてたらね。」

「うん。」

はしゃぐ子供の背中に、細長い影が差す。

それを見上げて、リオンはああ、と笑みをこぼした。

週に三回一緒に施療院を手伝っている少年である。

素直で人懐こく、リオンの後をついてくるいつものはつらつとした笑顔が、今日は幾分青ざめている。

リオンは、おやと目を見張った。

「どうしたんだ？　今日は施療院の手伝いじゃ……。」

「り、リオン・・院長室にくるようになって……。」

リオンは、訝しげに首をかしげ、子供達に声をかけて離れると、少年と共に背を向ける。

「……何かあったのか？」

「さっき、皆が話してたんだ。玄関に馬車が止まってて……。」

その表情は、ある程度の事情を知っているからこそそのものだった。

「馬車の紋章が、ゲーゼルヴァインド子爵家の物らしい……。」
「……なんだって……？」

「あら、まあ。ご立派になられて・・・」
「・・・・奥様、ご無沙汰しております。」

院長の応接間に入ると。深い赤茶のドレスに身を包んで華やかに微笑む女性はリオンの姿を認めるとソファから立ち上がった。その女性を認めると、リオンは久しぶりにすうっと表情を抑え、一礼した。

「リオン様、いままで窮屈な場所ですぞやご苦労なされたことでしょうけど。このたびは良いお話ですわよ。これで、亡き奥様から貴方様をお預かりしたあたくしの面目も立つというものですわ。」
「それは、痛み入ります。」

につこりと微笑んで、綺麗な声で返事をする。

女性は、満足したかのようにやや頬を上気させ、ドレスのすそを少し引っ張るとソファに座る。

しばらく、そわそわする女性と、悠然と向かいに座るリオンの間に妙な沈黙が流れた。

がちやり。

その沈黙が破られて、院長室から黒い髪がゆらりと揺れるのが見えた。

こめかみにかつと血が上るのがわかる。

リオンは、こぶしをきつと握り締めてそれを押さえ、なんとか一礼する。

「久しいな。」

「父上に於かれましては。ご機嫌麗しく。」

通り一遍等の挨拶を施すと、父はうむと頷き、院長に一礼した。

「では、明日にまた伺います。」

「・・・わかりました。」

そのまま、院長の声が扉の向こうに途切れる。頭をたれたままのリオンに淡々とした声が意外な言葉を告げた。

「王都の屋敷に行きなさい。」

「・・・え？」

「大聖堂の司祭見習いか魔術師見習いの職を見つけてやる。こんな田舎でくすぶっているよりはいいだろう。明日、迎えに来るから今晚中に支度を整えなさい。」

「待ってください。・・・今更、如何いうことですか。」

立ち上がり、なんとか冷静を保ってそうたずねると、ちらりと一瞥して、父はそれ以上彼を見ることは無かった。

「如何いうこともこういうことも無い。もう決めたことだ。拒否は許さぬ。・・・今まで世話になった恩返しでもしてもらおうということだ。」

世話になってなんか・・・

そういいかけて、リオンは口をつぐむ。

自分がこの修道院いる為に、それなりの補助金が動いている事を知っている以上、彼は言葉を飲み込んだ。

「明日だ。いいな？」

「・・・わかりました。」

「では、もういいぞ。」

それ以上の会話は望まないと言外に言われたと悟り、リオンは一礼をして部屋をでる。

扉を閉める寸前、声がもれ聞こえてきた。

「とはいえ。貴方・・・そう簡単に事が運ぶものですかしら。」
「なに。先方も認めざるを得ないだろう。・・・顔ばかりか、声も良く似ているからな。久方ぶりにリオンに会ったが、あの男と瓜二つだ。間違いなかるうよ。」

その言葉に、閉じかけた扉が止まる。

がくがくと指が震えるのをリオンは必死で押さえた。

「・・・無名のあの頃はともかく。宮廷魔術師の今となっては結構な醜聞だ。こちらの言い分に従わざるを得ないだろう。」

それ以上聞きたくない。

そつと扉を閉じたりオンの耳に、さほどの少年の声心配そうに届く。振り向いたりオンの表情に、友人は顔を強張らせて近寄つた。

「リオン……？ 大丈夫？」

「大丈夫。」

「顔色、悪いよ？」

大丈夫。そう言いおいて、リオンはその場をふらふらと離れた。

[illegible]

丸い月を窓越しに眺めて、一人きりの部屋の中央で、リオンは瞳を閉じていた。

宮廷魔術師の今となっては・ ・ ・

きつと、自分を切り札にして魔術師に取り入り、というより付け込んで、中央勢力に食い込むつもりだ、と思う。

宮廷魔術師の後ろ盾は大きいだろう。

地方領主の父にとってはまたとない機会だろう。

俺が現れると、その人にも迷惑がかかるんだ……。

同じ顔

同じ声

ぞつと背筋が凍った。

「……………」

どうしたら良いのかと思う。

だけど、ぐずぐず迷う時間は無い。

「……………このままじゃ、俺は飼い殺した。」

きっと、父の意のままに動かされ、扱われるのだろう。

……いっそ、ここを出て、逃げ出すか。

だが、リオンはこの修道院以外を知らない。

「一人で、生きていけるのか。ルドの話を聞く限り、いろいろな危ない事だってあるし。」

下手すれば死ぬ事だってありうる。

だまされて、無一文になることだってありうる。

……地に堕ちた生き方になる事だってある。

「だけど、このまま言い成りになるよりは……」

リオンはくつと唇をかんた。

「……ようやく。決心がつかしましたか。」

「院長……」

しらじらと、夜明けが訪れようとしていた。

そっと、寄宿舎の扉から外に出たところで院長の小さな姿が目の前に現れ、リオンはどきりと肩を震わせて、立ち止まる。

「・・・あの・・・」

一気に背中がひやりとした。

表情を凍らせて、何か口にしようとしたリオンの目の前に節くれだった手がかざされ、さえぎられる。

「私は、何も知らなかった。何も聞いてない。・・・気がついたら、君の姿はこの修道院から消えていた。・・・それで良いでしょう？」

軽く手をかざした院長の言葉に、リオンは言葉を飲み込み、続いて目じりにこみ上げる何かをこらえながら頭を下げた。

「・・・すみません。」

「この外には、きっと辛いことばかりが広がっているよ。・・・それでもいいのかい？」

しばらく、言葉を搜した後、リオンは頷く。

「・・・何より、俺が、俺の意思で決めたことですから。今まで唯々諾々と流されて来たことではなく。俺自身で決心したことですから。」

「そうか、ならばいうことは無い・・・。」

しわがれた手が、リオンの手にひやりとしたものを握らせた。それはジャラリと音を立てて、彼の手の中に収まる。

「これは・・・。」

「神職の証ですよ。きっと貴方の力になる。」

しわがれた手が暖かく。

ゆっくりと包む手の中で冷たく真新しい金属がとがって彼の手のひらを刺激した。

「リオン。信じる人にも、そうでない人にも。神は平等に試練も加護もおあたえになります。それを忘れないように。」

「先生……」

「貴方が信じていても、いなくても。神は貴方の近くで、ずっと貴方を見えています。」

懷から、白い封筒を取り出して握らせる。

「程近い町に知り合いが居ます。彼はとても気のいい友人でね。そこをたずねてみるといい。力になってくれます。」

「……ありがとうございます。」

「もう、行きなさい。貴方に、神のご加護があらんことを。」

その言葉と共に、暖かい手が離れる。

「……俺、行ってきます。」

「……」

はじめてみたときはもっと大きな体だったと思う。

いつの間に、こんなに小さな背になったのだろう。

はじめてみたときも、この人の瞳はやさしかったと思う。

自分は、ここに追いやられて捨てられるのだと。
絶望したあの日も。

この人の瞳は同じだった。

それが、じっとこちらを見ている。

リオンは、それを時折振り返り、振り返り。
細い道を歩いていく。

初めて、踏みしめる街道。
初めて、広がる視界。

こんなにも。
世界は広がったのか。

こんなにも。
己の姿は世界に対して小さいのか。

「……生きてやる。」

リオンは、くつと頬をぬぐうと振り返ることなく、前を向いて歩き出した。

黎明が、
リオンの髪を朱に染め、
その姿ごと呑みこんでいった。

第5話

その一歩一歩がひどく重く。

じつとりと世界が自分の肩にのしかかるような感覚で。

腰を伸ばせば、ぐらりと視界がゆがむ。

しまったなあ。

ぎりぎりと胃に穴が開きそうな感覚はどうの昔に消えうせて。

今は、空気すら、じつとりと自らに襲い掛かるようだ。

かすむ目の向こうにちらちらと綺麗なきらめきが動いている。

いいにおいだなー

暖かい香りが鼻腔をくすぐってぎゅうつと身を刺激した。

がくりと膝が崩れる。

ひっくり返った視界には綺麗な星空が見えた。

・
・
・
・

「目は？何色だった？」

「倒れてたんだもの。わかんないわよ。」

「空の色だといいなあ。」

「幾つかしら？ まだ子供っぽいし、15、6くらい？ 指、ほっそーい。」

「ほらあ、あんまりあちこち触らないのよ。起きるわ。」

耳がひくりと動いて、やや眉根がよる。

うつすらと瞳が開かれる。やや釣り目の緑碧色の石がようやく周囲にお目見えした。

「……………」

「あ、気がついた。」

「……………」

ぼんやりとしているらしく、状況がまったく飲み込めていない緑碧の瞳は、自分の顔を覗き込んでいくつかの好奇心に満ちた表情をしばらくぼんやりと見つめたあと、大きく見開かれる。

「う……………うわあああああつ。」

そのまま、がばりと跳ね起きると、その場から距離をとりながら声をあげた。その声は、天幕を突き破るかのようにあたりに響く。

「な……………なんなんですかっ!？」

「なんですかって……。ねえ？」

「それは、こっちの台詞よね。」

くすくすと、黒い巻き毛を揺らして一人の女が笑う。

黒い髪を結い上げた女が、赤い唇を突き出すように、顔を寄せ、笑みをこぼした。

「貴方。何処の子？」

「え？」

「東の生まれじゃない？ 名前は？ いままで如何してたの？」

「え？・・・え？」

女が近づくにつれ、少年は、真っ青な顔で口をぱくぱく開けている。

「やめな。」

奥から静かな声が響いた。

「えー。だってえー。」

「おやめったら。おびえてるじゃないのさ」

「はあい。」

少し不満そうに口を尖らせて、女はやっと男から離れる。

少し、ほっと息をついて、彼は奥にすわり、肘掛にひじを置いてキセルをふかしている女を見つめた。

黒い髪が蛇のようにくねって肩から豊かな胸の上を流れている。たっぷりとした赤い唇が、少し開くと間から白い歯がのぞいた。

「キミ。夕べ行き倒れてたけど。どうしたの？」

「え……。あ……。」

きよろきよろと周囲を見回して、彼は瞳を瞬く。女は、ふうつとゆつくりと煙を吐いて

「あたしの予想だと。どっかでスラれて一文無しってトコじゃないかと思うけど。」

「は……。はい。」

「自分の財産も守れないなんて、とんだバカね。あたしが拾ったくらいいいようなものの。明日になったら、身包みはがされてても仕方ないわよねえ。」

「はい……。ありがとうございます。」

ぺこん、と頭を下げた少年の綺麗な金髪を見つめて、女は口元にいと吊り上げた。

「あら。礼を言うのは早いんじゃないかしら。あたしは、キミを“拾った”だけで“助けた”とは言っていないわよ。」

そろそろと近づいて、少年の頭先からじろじろと無遠慮に見る。煙草の煙とふうーっとその鼻先に吹きかけると、少年はごほごほと咳き込んで肩をすくめた。

「特上、というわけではないけれど。悪くないわね。ソコソコ良
い値がつくかしら。」

「・・・？」

「ええー。もったいなあい。」

「それとも、あたしが食べてもいいけれど？」

「・・・????？」

「きやはっ。あたしも食べたあい。」

きやあ、きやあと周囲の女達が笑い声を上げる。

その嬌声の中央で、少年は青ざめるどころか、きよんと目を見
開いたままだ。

女達を恐る恐る見つめて、ぼそりとたずねる。

「あの・・・。あなた方は人の肉も食べるんですか？」

「・・・今まで生きてこれたほうが不思議なくらいね。」

急に静かになったテントの中で、少年はえ？え？と周囲を見回し
た。

「あの・・・。俺、変なこと言いましたか？」

「まあ、いいわ。冗談よ。・・・おなかすいたでしょ？」

そういわれた瞬間。

ぎゅるる

盛大に腹の虫が騒ぐ。

恥ずかしそうに耳まで赤くして、身をちぢ込ませた少年に、女はくすくすと目を細めて笑った。

「誰か、暖かいもの食べさせておやりよ。」



「へえ、修道院に住んでたんだ。そりゃ、世間知らずなわけだねえ。」

「飛び出して1年ほどは、紹介された教会で暮らしていたんです。」

スープとパンの簡単な食事でも、この若者には命の糧であつたらしい。

ありがとうございます、となんとかつぶやいてあつという間に平らげた。

ようやく人心地ついたらしい少年は聞かれるままにほつりほつりと身の上を話し出す。

幼い頃からすごしてきた修道院を飛び出したのは1年ほど前になるらしい。

それからしばらくは、紹介された教会で住み込みで働いていたのだが、老齢の司祭が最近亡くなり、新しい司祭に迷惑はかけられない

いからと一人で旅に出たのだそうだ。

「西のほうの国に、友人が住んでいるので、行ってみようかと思っ
っているんですが、途中寄った大きな町で手回り以外を皆盗まれて
しまっただけ。」

「バツカじゃないの？ 所持金くらい分散させて肌身離さず持つて
るもんでしょ？」

「……。」

「キミが行きたい国って東方王国のことでしょう？ かなり遠いわ
よ？ 坊やが一人で行くなんて無謀だわ。」

「……。」

金髪の少年は、黙り込んで周囲の女性達の話に肩を落としている。
紫煙をくゆらせて、女達のなかでも中心人物らしい女はひくりと
耳を動かし、片方の眉を器用に吊り上げた。

「……キミ、歌、謡える？」

しばらくの沈黙のあとの質問に、少年は首をかしげながらも頷い
た。

「え？……い、一応。聖歌は一通り。」

「楽器は？」

「リュートとレヴェックと、ツインヴァロムなら、なんとか。変声
期の間は聖歌隊で歌えないので、もっぱらそっちを。」

「何か歌ってごらんよ。そうねえ……“Dies irae（怒
りの日）”がいいわ。」

暫く、目を瞬かせて。

彼は言われたとおり、聖歌をゆっくり歌い始める。

ゆるゆるとした伸びやかな声があたりの空気を震わせる。

声が、テントの中央から、天幕の一番高いところへ登り、そこからさわさわと雨のようにあたりに降り注いでいく。

「・・・・・・・・。」

歌い終わっても、誰もが口を開かず。

天幕を見上げたままぼんやりとする女さえいる。

「・・・・・・・・誰か。」

その沈黙を破り。

女は、少年を見据えたまま、ふうーっと顔を横に向け、煙を吐いた。

「ゲオルグを呼んできな。・・・・・・・・使えるガキがいるって。」

その言葉に、我に返った女の一人が腰をあげ、天幕を出る。

「あたし、聖歌ってはじめて聞いた……。」

「声の良い子だとは思ってたけど。綺麗に歌うのねえ……。」

「ね、他にも何か歌ってよ。言葉が古臭くって何言ってるんだかわかんないけど、綺麗な曲だわ。」

また、急に近づいてきた女達に若干青くなりながら身を引いた少年に、名前は？とたずねる。

「リオンです……。俺は、魔法使いなので。本名はいえません。歳は16になったばかりです。」

「そう、わかったわ。あたしの名前はエカチェリーナ。ここらあたりの皆はカテジナって呼んでる。歳は21よ……。あたし達は旅芸人。彼方此方移動するの。東方王国にも行くけど、まっすぐ行くわけじゃないから、時間はかかるわよ……。それでもいいなら、一緒に来る？」

その言葉に、リオンと言う少年はきよろきよろと見回す。

「え？」

「どうせ、一文無しなんでしょ？ いらっしゃいよ。」

「一人で行っても楽しくないし！ それに、キミ無事に着くかわかんないわよ！」

「ゲオルグが楽器も歌も教えてくれるわ！」

「他の男達が、身を守るすべを教えるわ！」

「いらっしゃいな、リオン。」

女達がかわるがわる言葉をかける。

その言葉にいちいち首をめぐらせているリオンに、カテジナはふつと笑みをこぼした。

「どうする？ このまま、野垂れ死にするのと。自分の技術に命かけて生きてみるのと。どっちかしら？」

少年は、こくりと頷いた。

第6話

新緑が、リオンの背中に影を落としている。

ゆらゆらと小さく揺れる木漏れ日がしゃんと伸びた背に降り注いでいる。

少年の線の細い首根にちらちらと光が当たる。

腰まで伸び、ゆるくひとつに束ねられた金髪が、背中で一房、揺れては背をすべるように移動している。

その小さな動きは、その背の持ち主にはあまり問題になるものではないらしい。背筋をのぼし、大地に胡坐をかいて、もう一刻ほどはそのままの姿勢がじりとも動かずにいる。

耳が久方ぶりに、ほんのかすかに動く。

その刹那。

ぶんという音を立てて、鋭い光が彼めがけて振り下ろされた。

ざくりと大地を削り。大剣が地面に埋まる。

「ち。」

筋肉ではちきれそうなくらいに太い腕が忌々しそうに剣を抜き、振り上げたところでその背中にうんざりした声が届いた。

「いい加減にしろよ。」

「生意気なこった。最近はかすりもしねえ。」

男が振り向くと。

ゆらんと金色の束がゆれている。

「それかすったら、俺死んでる。」

今度は大空に胡坐をかいて、眉根を寄せて少年は、逆さまのまま相手に不満をぶつけた。

「最近、ほんっきで俺のこと殺そうとかかってるだろ？」

「あ？ 殺す気でかからねえとおめえのためにならねえからなあ。

瞑想中だって言ったら、ハイソウデスカとまってくれる敵はいねえぞ？」

傷だらけの顔ににやりと意地の悪い笑みがはり付いた。男は、すぐに表情を引き締める。

「まだ支度もしてねえのか。今夜の舞台は、俺達で幕開けだって言われただろう？」

「え？ もうそんな時間？ もう戻る。」

リオンは、くるりとひっくり返るとすたとんと地面に降り立つ。

「早くしろ。座長にどやされるぞ。“ リオン・ル・フェイ” 。」
「あんたにまで、その名で呼ばれたくないよ。その減らず口、魔法でふさいでやろうか？」

軽くにらむと、大仰に肩をすくめられた。

「おおっと、くわばらくわばら。」

おどけた男は、ひよろりとした少年の背中をどん、と叩く。

「いっ……てえっ!! まったく! 加減しろよっ。」
「これっくらいでよろしてるんじゃない。このひよっこ。」

よろめいたリオンの抗議にも、まったく動じていない男は、がっはっはと笑うと手をあげた。

「じゃあ、今日の舞台もよろしくな!」

自分の天幕へと急ぐ背中、腰まで伸びた金髪が揺れる。
半ば駆け足のリオンに、一座の座長が声をかけた。

「リオン、まだ着替えてもないじゃないか。お前とザムエルが幕開けなんだぞ。」

「わかってるよ。いま支度するトコ。」

「あー、それから。カテジナが癪癪起こしてな。」

「えー？ またあ？」

リオンの非難の声に、座長は軽いため息をつく。

「そういうな。」

「・・・最近、舞台前のイライラが増してない？」

「ああ、おかげ様でな。」

舞台前のカテジナといったら、それはもう大変なものである。さしずめ、遠目に見てもおっかない稲光をチラつかせた暗雲といったところか。

支度中に少しでも気に食わないことがあれば、キセルを投げつけたり、道具をひっくり返したり、という具合だ。

「・・・で、俺に何しろって？」

「髪結いを手伝ってやってくれ。」

「・・・だいたい、そういうのって。踊り娘達の仕事だろう？ どうして楽師で軽業師の俺がやるんだよ。」

「そう言うなよ。お前さんが担当してくれれば、カテジナが大人し

くしているんだから。」

「ご機嫌取ろうとするから逆効果なんだよ。」

一座に世話になり始めのころのリオンもカテジナには手を焼いたのだが、こちらがおどおどしたり、負けじと大声を上げるとさらにヒステリーがひどくなるだけなので淡々と相手をしていれば割りに対処できるものである、と気が付いてからカテジナは割合大人しくなった。

「最近の客の中に、あまりたちの良くない輩がいるみたいでな、野次が飛んでくるのが気に食わないらしい。」

「ああ、このところ、毎日だよ。俺の軽業のときもやいのやいの言ってた。兵士っぽいけど、最近、軍が駐屯でもしているの？」

ここ数日やってくる兵士風の客の素行がイライラの原因のようだ。酒を飲んで他の客に絡んだり、舞台上の踊り娘に卑猥な野次を飛ばしたりと迷惑極まりない。

「ああ、戦が近いらしくてなあ。前線の小競り合いがあまり良い方向に進んでいないらしい。徐々に規模が大きくなっているんだと。」

「・・・その、戦の相手ってさ。・・・ひよつとして。」

やや、肩をすくめて声を落としたリオンに、座長は後頭部を軽く叩いた。

「ああ、東方王国だよ。・・・あっちに入るにはもうすこしかかるだろうな。」

その言葉に、リオンは表情を暗くした。その肩に、ぽんぽんと手が乗せられる。

「気を落とすな。」

「うん……。」

おざなりな返事を残し、リオンは座長と別れる。

この一座に拾われてから、半年が過ぎた。

本来なら、近いうちには東方王国へ入るはずであったが、このところ、国境付近の情勢が悪くなっているようで。座長もうかつに近づけないということである。

……ルドの奴、元気かな。

こうなるなら、情勢が良いうちに手紙のひとつでも出しておけば良かったと後悔するが、今となっては仕方が無い。

戦が落ち着いて入国が可能になることを願うだけだ。

「……まあ、それまでは、ここに居させてもらおう。」

そうつぶやいて、我ながら随分な心境の変化だと内心笑う。

何時の間に、居心地が良くなったんだろう。

教会暮らしの静かな生活とは一変し、毎日がお祭り騒ぎのようなにぎやかな生活である。

人々の生命力は、どろっとしたものに感じて、すこし暑苦しい。

すべての人々が、「生」に対して貪欲であり、しがみつき、あがいて生きている。

清貧、とは無縁の世界。

最初は、それが本当に嫌だった。

ゾッと寒気すら感じて、気持ちが悪い。

すれ違っただけの女の匂いに気分が悪くなり、胃の中を空にするほど吐いたこともある。

それ以上に、リオンの気持ちを揺さぶったのは、今まで学んできた生き方が、ここではほとんど通用しないことだった。

修道院で学んだことのほとんどが否定され、大半は“戯言”だと突きつけられた。

その最たるものが「女」という生き物である。

修道院時代、「女性とは。清楚で、しなやかであるが、近づいてはならぬ。女性は、神の僕である神父をを惑わすものだ。」などとお題目を唱えさせられていたのだが、そんなものは戯言にほかならない。現実はおしとやかだの清楚とは大いに関係離れたもので。天幕内を下着姿でうろうろするわ。酒を飲んでは大騒ぎをするわ。男をからかってはその反応を見て大笑いするわ。面白がられていると気づいて相手にしないようにつとめていれば、それはそれで彼女達のご不興を蒙ってしまうらしい。

女ってわかんない・・・

今まで対処したことの無い「女性」という生き物に、リオンはほとほと振り回されているのであった。

そんな急激な環境の変化に、今までの価値観がぐらぐらと音を立って崩れていった。

毎日は、リオンのそれまでの行き方を根本から疑うものであり、逃げ出したいとさえ思えるものであった。

思っても、今のリオンに生きるすべは此処にしかない。

生きるためには、此処で耐えて、東方王国に行くしかないのだ。

東方王国に着いてルドに連絡ついたら、さっさと出て行ってやる！

そう思い、我慢しているうちに、人とは妙なもので、案外慣れてしまうものである。

吹っ切れて、慣れれば、ここは居心地が良かった。

リオンの出生や家のことであれこれと言うものなどいない。

旅をする仲間、それだけで、同じなのだ。

同じものを食べ、同じように働き、同じ様に笑い、そして泣いた。旅を続けていくうちに、その強い生命力に彼自身感化されつつあった。

それまでの堅苦しいだけの性格や口調も随分と変化した。

最初は、小間使いとしてうろろと働いていたリオンであったが、楽器と歌をゲオルグという楽団取りまとめ役の男に認められ、そしてその身軽さから軽業師としても見込まれた。もっとも、その指南

役としてのザムエルは、リオンを戦士として鍛えるほうに喜びを見出してしまったらしいが。

最初は後ろから拳骨を見舞う程度であったのが、最近は大剣や錫杖等、かなり穏やかでない武器を持ち出してくる始末である。

彼を此処に引き入れたカテジナは、一座きつての踊り子で稼ぎ頭である。

人々を魅了する踊りは、力強い。

媚びることなく、卑屈になることもなく。ただまっすぐに生きている彼女そのもののような動きは、一度見たものをとりこにする。

この一座の看板とも言える存在である。

・・・まあ、当の本人の相手をする周囲はそれなりの苦労をとまなうのだが。

「遅いよ。一体何して遊んでたんだい。」

「ザムエルに言ってよ。いきなりブロードソード振り回してくるんだよ？ 最近エスカレートしてるって。相棒が死んだらどうするんだよ。」

天幕にあらわれたリオンへの第一声は一応歓迎のようであった。

キセルを咥えていらいとテントの中をうろついているカテジナに、リオンはむっと顔をしかめる。

天幕の入り口で、最近一座に入っただけの少女が真っ青な顔で立ち尽くしている。その姿を一瞥して、リオンは手をひらひらと振り、此処から出るように促す。

「あとは、俺がやっとくから。他の手伝いしててよ。」

半ば逃げるように天幕から出て行く音の後に、リオンははあとため息をついた。

「今日は、何言っただよ。」

「あたしの声にいちいち驚いて、びくついたあげくに、道具箱をひっくり返したんだよ。あんたが支度手伝ってたら終わる前に舞台がハネちまうって言ってやっただけさ。」

「昨日今日来た子にそんなこと言うなよ。はい、座って。俺だって自分の支度あるんだからさ。」

キセルを片手に、鏡台の前に座った女の髪を手早く漉き、香油を塗り始める。

「大体、いつもいらいら癩癩起こすから相手がおびえるんだよ。もう少し、穏やかにしなよ。」

「あたしの小言程度で泣いてたら、この世界やっていけないわよ。あんただって、何度もあたしに煙管投げつけられてたじゃないか。まあ、あんたの場合は、次の日はしれっとした顔で現れて、あたしが啜えた煙管から炎上げさせて仕返ししてくれたけど。」

「まあ・・・そうだけど。」

良い香りのする油を丁寧に刷り込んで結いやすく、しっとりときせた髪をいくつかの房にわけ、豊かに波打つ髪をせっせと結い始めた。

その間、カテジナはキセルを吹かせ、瞳を閉じ、だまっている。

激しい動きで、舞い、踊っても簡単には崩れないように。

だが、決して苦痛を覚えるような結い方はしない。

無心で、彼は黒い髪相手に奮闘していた。

「今日は、この飾りで良い？」

「ああ、いいよ。」

最後に、道具箱の中から適当に目に付いた小さな花を幾つもあしらった髪飾りをさすと、リオンは声をかけた。

特別な感慨も無いような声で女が了解するとリオンは道具を片付け、その場を背にする。

「じゃあ、俺は自分の支度しに戻るから。」

「あとでお茶。」

化粧の道具をがさがさと漁るような音に混じってぼそりとつぶやかれた言葉に、リオンは肩の力を落としながら返事をした。

「わかったよ。」

「リオン。」

背中に声がかかる。何？と振り向いたリオンに、鏡台に向かったままのカテジナの声が届いた。

「最近、背が伸びたんじゃないかい？」

「そうかな。」

見えない頭を確認するかのように手を頭に載せ、視線を上げるリオンに、幾分落ち着いたらしい声が聞こえる。

「・・・はやく、自分の支度しな。」

「あ、うん。」

何が言いたかったのだろうか。

リオンは首を傾げたが、あまりもたもたしていると座長やザムエ
ルにどやされると、彼は、カテジナに背中を向けた。

第7話

「さあて、お立会いお立会い。今宵も当一座へようこそ！」

口上師が朗々とした響きで舞台の幕開けを宣言している。

その袖でそっと客の様子を観察しながら、リオンはふうと息をついた。

「今日も満員だね。」

「ありがたいこった。」

筋肉の塊のような腕に大振りの剣をにぎりめ、ザムエルの声が返事をする。

幕開けの出し物は、客にインパクトを与え、気分を盛り上げるためにも重要だ。

ここでコケるわけにはいかない。

自分の衣服の手首にまかれた飾りがジャラジャラと音を立てる。

白い手袋は二の腕から手の甲までを包んで。中指の指輪で止めるようになっている。

白い衣服の上からまとうのは、ひらりと薄い水色の生地でそれは蜻蛉の羽のように繊細に透き通る。

金髪に良く映える赤い飾りは、しゃらんと涼しい音で人の注意を引くはずだ。

顔の半分を隠す白い羅を両耳にかけるように固定しながら、やや釣り気味の瞳でリオンは自らに気合を入れるべく、大きく深呼吸をした。

「・・・あと、一年、てトコだな。」

「何が？」

ザムエルの声に、リオンが振り向く。白い衣装の背中をぽんと叩いて、屈強な相棒は腕を組み、ひよろりとしたリオンの足先から頭のとてっぺんまでをひととおり見る。

「お前の格好だ。そろそろ、女物も限界かなと思っているところなんだ。この半年で背も伸びたし。そうになると、出し物の内容も変えないとな。」

「ほんと？ この格好やめていいの？」

「まだ、先の話だぞ。“男だか女だか良くわからない不思議な軽業師がいる”っていう線で惜しい気もするんだが。・・・まあ、最近、この辺が男っぽくなりやがったからなあ。服でごまかせるのも今のうちだな。」

がしがしと、確認するかのように、大きな手で最近骨ばってきた肩が掴まれる。

「そうそう、最近考えている新しい技もあるんだ。今度やってみようや。」

「うん・・・あ、でも。俺でいいの？ “男だか女だかわからない”のがいいなら、最近入った子にも身軽そうな・・・」

「阿呆。相棒を変えられるものか。」

ぺしっと額を小突かれて、当然と言う顔をみせた男は、剣をぶら下げ、舞台袖でリオンの前に立つ。

その背中影に隠れるように、おし、とリオンはうれしさを抑え

ながらも、両のこぶしを握り締め、布下に隠れた口元を緩ませた。

歌と楽器以外にもなにか芸があったほうが良いだろう。身軽のようだから、ためにしに軽業をやってみろ、といったのはザムエルだった。

言われるがままに手ほどきを受けるうちに、それなりに上達したらしく、舞台上に上げてもらえるようになった。

だが、初舞台の日に渡されたのはひらひらと風によって軽やかに舞う女物の衣装であった。

抵抗したのは言うまでもない。こんなの嫌だ。といったのだが、ザムエルとカテジナは冷たくも現実的だった。

お前に、「一人前の男」の役は早すぎる。

ひよろひよろと細長い肢体と線の細い首や肩は、成長中とは言っても華奢な印象を与える。

もともと修道院育ちのリオンは、身こそ軽く敏捷性に優れてはいるものの、筋力そのものは大してなかった。

筋肉の塊のようなザムエルと並べば、貧相に見えるのはそれは当たり前だ。

ならば逆にリオンの見た目の華奢さと脚力のギャップを生かしたほうが良いと、二人が判断したのも、今ではわかる。

あの時は、唯、嫌で。

恥ずかしいという気持ちとみつともないという気持ちがぐちゃぐちゃになって。

じゃあ舞台に上がらないと拗ねてみたが、相手は一枚も二枚も上手であった。

「それなら、あんたは用済みだ。荷物まとめて出て行きな。」

カテジナの冷たい言葉に、リオンはひくりと喉を鳴らした。

「あんたが卑屈になれば、その分客はわかるよ。みつともないもん見せたら、唯じゃ置かないからね。」

カテジナの台詞がぐっさりと響いて。リオンはしぶしぶ首を縦に振ったのだった。

一度舞台に上がってしまえば、案外気にならなかった。むしろ、顔を半分かくしていたのが幸いしたらしく、集中できた。もっとも、他の踊り手達のようににこやかに微笑んだりすることはかなり無理があった。ならばいっそ無愛想でいてやれと腹を括ったら、クスリとも笑わないのがかえってものめずらしかったらしい。“結局アイツは男なのか女なのか”と不思議がられ、リオンとザムエルの軽業と魔法を使った芸はそれなりに人気を博している。

「では、今夜の幕開けは、蒼き炎を操る不思議を皆様にとくと御覧あれ。一座一番の腕自慢ザムエルと、炎を従える軽業師“リオン・

ル・フェイ”のお出ましだよ。」

口上の声に、思わず、腰砕けになるリオンである。

「この口上、なんとかならない？」

「文句なら口上師に言え。」

一体、誰が言い出したのやら、魔女リオンとはかなりありがたいあだ名である。

いくらなんでも、魔“女”は無いよなと彼は肩を落とした。

「さあ、今日も頼むぞ。相棒。」

ザムエルの野太い声とともに、リオンは舞台へと一歩足を踏み出した。

心拍が震えるような太鼓の音ともに、ザムエルの振るう剣を身軽に交わしながら、炎に照らされた筋肉がうなり声を上げているような剣の動きに合わせ、すれすれを交わしながら跳躍を重ねる姿に人々は賞賛と歓声をくれる。

だが、その中に、興を削ぐような声が聞こえているのも、事実であつた。

「男なんざ見たくもねえ。引っ込めー。」

酒を飲みながら、男が三人、最前列で野次を飛ばしている。

周囲の客は至極迷惑そうに、ちらりと一瞥して無視する。

客の一人が、一人の兵士と目が合うや、絡まれている様子もみえた。

ああ、またあの兵士か。

白い羅の下でため息混じりに口の端を引く。

男達は酒瓶を煽って、酒臭い声を飛ばした。

「やい、金髪。お前は男か、女か、はっきりしろ！」

我慢しろ。

ザムエルの目が、そういつている。

わかってるよ。相手するだけ、バカだ。

そう目で返して、淡々と動きをこなす。

暫く無視を決め込んでいたものの、男達の野次はいっそうひどく、客達はすっかり興ざめた様子で、少しずつ席を立つ者も出始めた。

「おもしろくねえぞー！」

面白くないのはこっちだよ。

そろそろ、どうにかしてほしい。

そう、思い始めた頃に、ひととき大きな声でリオンの耳に響く声があった。

「金髪！ 男でも女でもいいぞ！ 俺の相手をしろ！」

むかっと頭に血が上り始めるが、なんとか抑える。

だが、次に叫ばれた言葉は、彼にとって到底我慢できるものではなかった。

「どうせ、お前も娼婦の子だろう！ 金ならあるぞ！」

その瞬間。

きやつという女の悲鳴が聞こえた。

舞台を明るく照らす篝火が、それまでの何倍もの勢いで炎を吹き出す。

リオン、と名を呼んだのはザムエルだったか、袖で見ていた口上師か。

あつと言う間に、ザムエルの片方の手にある短剣を奪い取る。大きく、弧を描くように宙返りをし、舞台を飛び出した。

「・・・・・・・・わ・・・・。」

ぶいん、とうなり声を上げて、切っ先が兵士の眉間に迫る。

周囲の男達は、ひっと声を上げて距離をとった。

「お望みどおり、相手になってやろうか？」

冷え冷えとした声が、朗々とした響きで兵士にかけられる。

ごうごうと勢い良く噴出す炎が、かがり火から漏れんばかりに天に向かってほえていた。

「・・・・・・・・悪かった・・・・。」

どこからか、きゃーという悲鳴が聞こえた。

その声をが、やけに遠くに聞こえる。

額に浮かぶ汗がやけに冷たくあごに伝わる。

肩で息をついて、リオンは短剣を握り締めたまま、兵士の瞳をにらんだ。

客になんてことをするんだと、座長に散々叱られた。

「客の野次に我慢できずに、剣を向けただあ！？ 一体何を考え
てるんだ！ おまけに、兵士と喧嘩しやがって！ おかげで今日の
興行は台無しだ！ これで悪い評判が立ったどうする！ お前が責
任取れるのか！」
「……。。。」

結局、その日の舞台は舞台にならず。客に金を戻して閉めること
になった。

素行の問題はともかく、客は客だ。客の野次を我慢できないでど
うする。それでもお前はいっぱしの旅芸人のつもりかと、一刻ほど
怒鳴られている間、リオンは殴られた頬を時折押さえ、頭をたれた
ままであつた。

「……すみません。」

「こんなことじゃ、お前を舞台に上げるわけにいかん。」

しばらく、軽業も音楽もやるな、頭を冷やせ。

そんな言葉を最後にリオンはやっと開放された。

星空が輝いて静かにひっそりとしている。

本来なら、今頃は舞台の終わりの高揚した雰囲気包まれている筈だったが。今日は、いやに重ったるい空気が帳を下ろしていた。

「こつてり絞られたねえ。」

「……カテジナ？」

座長のテントを出たところで、声をかけられた。

先ほど、綺麗に結った髪をすでに梳いて、一座きつての踊り子が腕を組んで立っている。

「兵士二人と喧嘩するなんて、やるじゃないか。」

「短剣とられて、顔殴られただけだよ。」

「……まあ、確かに、泥仕合も良いトコだったけどね。まったく、何さ。この髪。」

「明日、適当に切りそろえるよ。」

兵士ともみ合った際に、腰まで伸びた髪の半分が無残に切られている。肩に届く長さに切られてしまった一房をつまんで、特に感慨もなくつぶやいたりオンの手を細い手が掴んだ。

「いらっしやい。髪切ってあげる。」

明るく周囲を照らすかがり火の側に椅子を一個置いて、リオンはそこに座らせられた。

自分の背後でハサミを動かしながら、カテジナが無言で彼の髪を切っている。

「・・・あんたの母親って、如何いう人なの？」

暫くの沈黙の後に、急に言葉が始まる。リオンは、へっと肩を揺らして叱られた。

「うごくんじゃないよ。」

「・・・・・・・・あんまり、言いたくない。」

そのまま、また沈黙が支配した。

じゃきん、じゃきん、という音だけが火の粉とともに闇に吸い込まれていく。

赤い炎に金の髪がちらちらと光って、案外綺麗だと思う。

・・・だから受け継いだのか、俺は知らないけどさ。

俺は魔法使いだから、髪はそこらに放らないでといったので、カテジナは丁寧に麻袋に切り取った髪を入れている。不定期に動かされるハサミの音と、時折自分の頭に触れる細い指の感覚が、リオンの気持ちをようやく落ち着かせていった。

「あたし、娼婦の子よ。」

「・・・そうなの？」

おもわず、後ろを向こうとして、ぐいと頭が押さえられた。

「ほらあ、動かないの。．．．もっとも、直接あたしが知ってるわけじゃないけどさ。前の座長．．．今の座長の親父さんに、母親が生まれたばかりの赤ん坊だったあたしを売ったみたい。」
「．．．．．」

売った、という言葉がやけに軽く言い放たれた。

「まあ、思えば。そっちのほうが良かったわよ。でなきゃ、あたしも今頃女郎やってる筈だし。あたしを売り払うことで、自分と同じ境遇から遠ざけようとしたせめてもの親心、つてところかしらねえ。」
「．．．．．」

淡々とした口調で、つむがれる言葉は、じゃきん、じゃきんという音とともに、やけに静かにひびく。

「母上、は．．．」
「ははうええ？　なに、そのお上品な物言いはさ。」

頓狂な声に、一瞬言葉を詰まらせた後、リオンはほつほつと言葉を続ける。

「．．．．母は、自分の家の借金の肩代わりのために父と結婚して。だけど、父じゃない何処の誰だかわからない男との間に俺を

生んだ。そして、俺のこと、生まれてこなけりや良かったって顔しながら、死んでいった。」

「それで、あんた修道院に放り込まれたんだ。」

と、いうか。金持ちの家の子だったんだねえ。驚いた。

からからと笑いさえ聞こえてきそうな、そんな明るい声で、カテジナはリオンの髪を整える。

「ほら、出来た。あら、いいじゃない。あんた、長いのをただひつつめてるだけだったから。これからはそうしなさいよ。」

自分の目の前に鏡が手渡される。その鏡には、頬の輪郭に沿って切られた金髪がさわさわと頬に影を作っている自分がいた。後ろに手をやると、先が細く長くなっていて、随分と軽い。

「・・・なんか。」

「なによ、あたしが切ったのが気に食わないの？ 邪魔なときにはちゃんと一つに束ねられるわよ。」

「・・・違うけど。」

なんか、妙だなあと思う。

いままで、見たことの無い顔に見えた。

「あんたの母親の、好いた相手の子なんだから、胸はりなさいよ。」

鏡の自分の後ろには、優しい笑顔。自分の頭をぽんぽんと叩いている。

「そんなの、わかんないよ。」

「きつと、そうよ。」

妙に断言されて、リオンはきょとんと目を見開いた。

「なんで、わかるんだよ。」

「本当のことなんて、誰も知らないじゃない。だから、そう思ってるほうがいいのよ。あたしを売った母親が、本当はどうしてあたしを座長に渡したのなんて、あたしがわかるわけじゃないじゃない。本当は、あたしのこと、うっとおしかったのかもしれないし。だけど、“自分のことを思ってそうした”とっておくほうがいいのよ。結局“あたしが如何思うか”なんだもん。」

そうなのかなあと思う。

「・・・卑屈に生きるんじゃないよ。あんたが、誰の子でも、“あんたはあんた”なんだから。自分のことは、自分で決めるしかないでしょ。生きてるのは、あんた自身なんだから。」

麻袋、どうする？

金髪の入った袋のことを聞かれ、リオンは小さく答える。

明日、自分で焼く。

いろんなものを含めて、焼き払う。

返事をしながら、何かがこみ上げてきて。

リオンは、肩が震えてきた。

「カテジナ。」

「なあに？・あんだ、何泣いてるのよ。」

「泣いてなんかない。」

ぐっと唇をかみ締め、リオンは頭をたれた。

「ありがとう。」

「なによ。髪切ったくらいで。ああ、その髪、あたしに少し頂戴。魔法使いの髪って御利益ありそうだから、お守りにしておくわ。」

うん、いいよ。

顔を見ないで返事をする。

それは、あとで後悔した。

・・・そのときのカテジナの顔を、もっとちゃんと見ておけばよかった、と。

第8話

次の日の朝。騒々しい物音で目を覚ました。

物音、というレベルではない。

悲鳴と、怒号と、馬のいななき。

・・・何、これ・・・

不安で、ざわりと肌があわ立つ。

意識が覚醒した瞬間、周囲の音は一気に音量を上げた。

「何がおきてるんだ？」

「リオン！ リオン！ 起きて！！ 起きとくれ！！」

ばさりと、天幕が上がって、カテジナが転がり込んでくる。その顔には、今まで見たこの無い緊張と、恐怖が張り付いている。

「カテジナ、一体何が起きたんだ？」

「町の近くで戦が始まったんだ。もう街中まで兵士が来てるんだよ！ はやく逃げないと！」

あわてて、リオンはベッドから飛び起きた。荷物をまとめ、衣服を整える。護身用にとっておけと前にザムエルがくれた短剣を腰に

結わえるとカテジナの震える肩を軽く叩いた。

「みんなは？」

「いま、座長が集めてるよ。」

「うん。じゃ、行こう。」

リオンの、その手に、ぐしゃりと何かが握らされた。

ずしりと重みのあるそれは、金子の袋らしい。

「何？これ。」

「女達と一緒に行動してたら、だめだ。あんたは一人で逃げな。」

強い口調で告げられた内容に、リオンは目を見張る。

「な、なんでだよ！？俺だって・・・。」

「東方王国に行くんだろう！！ここで、死ぬわけに行かないんだろう！？　なんのために、ザムエルがあんたを鍛えたと、思ってるんだい！！」

・・・なんだって？

後半の台詞に、リオンは喉を凍らせた。

「一人で、生きていけるように。一人でも、何処でも、生きていけるように・・・ザムエルがあんたに武器を振り回したのは、あんたに“せめて一人で逃げおおせる力だけでも”与えたかったから。世間知らずで、坊主崩れのあんたが、一人でしっかりと前を向

いて生きていけるように。・・・あたし達の子供みたいに、死んだりしないように。」

詳しいことを聞くことは出来なかった。追い立てられて、天幕を出る。

「早くお逃げ！ あたし達はなんとかなるから！ 絶対、絶対、死ぬんじゃないよ！！！」

「カテジナっ。無事で！」

数度、振り向いて、走り始める。

逃げる、といっても。ただ走るだけだ。

戦は、もう街中へと迫っていた。
馬が、兵士が。もみ合っている。

剣戟と、怒号と、悲鳴と、血しぶきが、あたりを埋め尽くしている。

「・・・うそだろ・・・。」

暫く走った先の、目の前の光景に、リオンは言葉を失った。

もう、町の外が何処に方向なのか、彼にはわからないほどに、戦闘が視界をさえぎっていた。

砂埃と、血煙で、行く手を阻んでいる。

これじゃ、カテジナたちだって、無事じゃすまない。

第一、俺一人で逃げるなんて、いやだ・・・!!

意を決して。彼はまた戻る。

一座がテントを張っていた場所まで。

・・・と、思われる場所まで。

そこもすでに兵士達でごった返している。

「カテジナー！ ザムエルー！」

ありったけの大声で叫ぶ。

兵士の戦闘を避けながら、名を呼びながら走る。

足元をすくわれ、地面に接吻をした。
じやりっと砂が口の中に入る。

起き上がろうとした瞬間、がしつと背中が踏みつけられた。

「な・・・！」

「ああ、なんだ男か。まあ、あまり役には立ちそうもないな。」

何するんだよ！ 暴れようとして、今度は顔を踏みつけられた。

「ああ？ まだ自分の立場がわかってないようだな。・・・最近、兵士の数が足りて無くてなあ。どっちの陣営に売りつけても追いつかないんだよ。・・・お前は、これから前線に行くんだよ。どっちの陣営かは・・・まあ、あとでのお楽しみ、だな。」

淡々とした声が、あたりの喧騒からは嘘のように静かに聞こえてくる。

「こういった戦で混乱したところに何時までもぐずぐずしているのが悪いんだぜえ？ 坊主。」

また、じやりつと砂が口に入る。

「今日は、まあまあ良い狩ができたなあ。女が十数人に、小僧が一人か。」

・・・女が・・・。

ぞわりと腕があわ立つ。

魔法を唱えようとして、指を動かそうとするが、その腕に縄が巻かれる。喉元にひやりとした鋭いものが当てられた。

「おっと、暴れるなよ。……アイツみたいに、なりたくなかったらな。」

男の声が指し占めす方向に、目を向ける。

屈強そうな腕に握り締められた大きな剣。

……あれは……

うつろな瞳が、こちらをじいとにらんでいる。

てめえ、なんで戻ってきやがった。

そんな言葉が聞こえてきそうで。

リオンは、ありったけの声でその名を呼んだ。

「ザムエルっ ザムエルっ!!」
「うるせえっ。黙れガキ!」

がつんと後頭部に強い衝撃を感じ。

リオンはそのまま記憶を失った。

第9話（前書き）

これ以降、間接的に若年層に不適切な内容が含まれているかもしれません。自己責任でご覧ください

第9話

地獄とは、信仰を失った者が行くところです。

しわがれた声が、静かに言い聞かせる。

何処にいても、何をしていても。神は貴方を見ていますよ。
常に、貴方のそばに。

院長先生、と小さくつぶやく。

……ここは、その地獄ですよ。



この軍で“傭兵”とは二つの意味を持っている。

“後払い”の傭兵と、“前払い”の傭兵だ。

報酬を払う時期が違うだけ、の違いではない。

“払う相手”が違う。

“後払い”の傭兵は、戦後の功績に合わせた褒章も含めて、その「当人」へ。

“前払い”の傭兵は。

“「当人」を連れてきた”ものへ。

“支払い済みの傭兵”のその後は、“雇い主”の自由だ。

「支払った分」は働いてもらうが。
その後のことは知らない、らしい。

“お前はあまり役に立ちそうも無いな”

彼を見たとき、“雇い主”はそういった。

“・・・まあ、いい。病院にでも行っている。死人の始末く
らいは出来るだろう”

「起きろ、坊主。」

その言葉だけで、彼は自分のことだと、認識した。

今日も、地面は堅かった。薄い毛布程度では、ごつごつしたそこ
を柔らかくはしてくれない。

のろのろと身を起こし。半分閉じたような目をこする。

座り込んだ膝に、乱暴に紙に包まれた堅いものが放られた。

「さっさと喰え。」

無言で、包みを開く。ぼそりとしたそれは、唯でさえ乾いた喉を余計に干上がらせた。

ちびりと、水筒の水を含む。配給は一日一回だから、あまりたくさん飲むのは、やめておいた。

そうやって、まずい携帯食料と水で腹を膨らませて、一日が始まる。

すっかり伸びた髪を一度束ねなおし、彼はやつのことで立ち上がる。

「しっかり働け。今日も、野郎どもが担ぎこまれてくる。」

兵舎、と「呼ばれる」場所から、出ると、日差しが目にもぶしい。いや、もう、そんな感覚どうでも良かった。

どうせなら、すべての感覚を遮断したい。

触覚も、嗅覚も、味覚も、すべての感覚なんていらぬ。

彼は、ぼんやりとした頭の芯のしびれとともに、与えられた仕事場へ入っていく。

そこは、すでになれた匂い。

鉄くさい、血の匂い。

排泄物の匂い。

わずかに、消毒の匂い。

「衛生兵は良いよな。最前線に出るわけじゃねえし。お前は、安全な場所で淡々と包帯換えてりゃ、それですむんだからな。」

包帯を替えてやっていると、兵士の一人が悪態をつく。

「済ました顔してねえで、なんとか言えよ。ああ？」

片腕を無くした苛立ちからか、兵士の吐き出したものは、少年の頬にぺとりと張り付く。彼は無言でそれを袖でぬぐった。

「へ。この腰抜け。」

その無様さに、いくらか気が晴れたのか、兵士は乾いて皮の浮かぶ唇を曲げた。

相手は、何も言い返さずに、淡々と消毒をすませ、包帯を巻きおわると、すくりと立ち上がった。

ガッン

立ち上がる際に、細いが武骨で筋肉質な腕が兵士の胸倉をつかみ、一度持ち上げた後、力いっぱいベッドにたたきつけた。

その物音に、周囲の兵士達が、それぞれ首だけを動かして物音の

中央に目を向ける。

「やかましいな。大人しく寝てろ。」

あくまで冷静な声。感情の一片も混ざっていないような、そんな声である。

その、やけに朗々とした響きは、兵士の臓腑をぞろりと凍りつかせるに十分であった。

「それとも、俺が一生寝かしてやろうか？ 楽だぞ？ 死ぬまで、何もしなくて良いからな。」

ぎろりと動く緑碧の瞳

“病院”に行くことがあったら、衛生兵の“瞳”は、見てはならないと他の兵士に言われたことがある。

恐ろしい悪夢を呼び起こす瞳なのだそうだ。

アイツは、“ここだけ”死人にするらしい。

兵士にそう教えた仲間は、人差し指で自分のこめかみを叩いたことを思いだす。

「・・・。」

兵士は、ごくりと喉を鳴らし、大人しく横になる。
それを冷たく見下ろして、彼は別の兵士に近づいた。

「坊主。俺の足がかゆいんだよ。掻いてくれ。」

「そんなもん、とうに無いだろう。幻覚だよ。」

冷たく言い放ち、彼は、水差しを交換する。

「坊主、手術だ、手伝え。」

奥から、声がかかる。その声に、抑揚の無い淡々とした声が返事をした。

「はい。」

ああ、また、あの声を聞くのか。と、胃の奥がぎりっと音を立てたような感覚がした。

麻酔なんてお上品なものはない。
手術、なんて高等なものでもない。

ただ、壊疽を起こし、どうしようもない腕や足を簡単な消毒だけで切断する。ただ、それだけだ。

それからあとは、時間との勝負だ。

戦が終わるのが先か。

己の命が尽きるのが先か。

あえて言えば。

この病院での一番の「古参」は医官で、次が彼である。

あとは、皆どっこいどっこいの「新入り」ばかり。

まあ、今のところ、一人だけ、「奇跡の生還」を果たして前線復帰したのもいたが。彼は少々事情が違う。

こんなところ、病院だなんて笑えるよな。

ふふ、と口元が笑みを作る。

・・・まあ、いいや。

彼は、考えることをやめた。

みんな、いないし。

こんな場所で、あいつと、連絡なんて取れるはずないし。

此処がどこだか、なんて知らないし。
どっちの軍かなんて、興味ないし。

目隠しをされて、この場所に放り込まれて以来、彼はずっと「ここ」に居た。

ひよろりとした手足に、華奢な風貌は、「雇い主」をいささか失望させた。

普通の兵士としては役に立たないだろう、病院でも手伝わせろと言うことで一応、衛生兵ということになっている。

施療院での経験が一応功を奏して、なんとか、医官達から役立たずだとはいわれていない。

おまけに、クルスを持っていて、もともとは教会にいたと言ったら、そちらのほうが喜ばれた。

・・・まあ、「俺達」の気休めだけだな。一日一回、経典でも音読してくれ。

兵士の一人の遺品から、泥や血でぼろぼろになった本をもらう。
こんなところに信心深い者もいたものだ。

俺なんか、クルス持つてる事も忘れてたのに。

皆に、毎日読んで聞かせるのも仕事のひとつとなった。
ただ、文字を目で追って声にしてやるだけ。

意味なんか、考える気も起きなかった。

ここは、どこかの戦場のようだった。

東方王国の軍か、それとも敵対する国かどうか、はっきりとはわからないし、そもそもどうでも良かった。

逃げ出す、なんてことは端からどうでも良かった。

そんなことしたところで、何処だかわからない場所で野垂れ死にするのが落ちであるし。

前線に近いところで迷えば、間違いなく、巻き込まれる。

ここは、とりあえず、安全で。とりあえず、寝る場所と食べるものはある。

腹が膨れれば、それでいいかな。

「仕事」をしていれば、とりあえず、食事はもらえたから、それでよかった。

・・・ザムエル。

あのうつろな瞳が、彼から何かを抜き取っていた。

あんな「死」を彼は知らなかった。

あれほど、無残で、うつろな存在もしらなかった。

いつも、神の言葉で送り出される存在たちとはまったく違っていた。

そして、此处で同じ様な塊になっていく存在に、どんどん、彼は何かを抜き取られていった。

「坊主！ さっさとしろ！」

医官の怒号が、聞こえる。

彼は、はあいと投げやりに返事をした。

第10話

「お前か。兵士どもが“魔女”って言ってる衛生兵は。」

例の「手術」の後、水辺で汚れた包帯を洗っていると茂みから声をかけられた。

手を止めて、顔を上げる。見れば、こざっぱりとした身なりの男だ。おそらく部隊長あたりの階級だろう。

髭もきれいに剃られ、衣服も糊が効いている。栄養状態も良いように、血色も良かった。

俺と大違い。

明らかに待遇の差は歴然としているな、と捻くれた感情とともに、彼は再び仕事に戻る。

暫く、無視を決め込んでみたが、相手は声をかけなおすでもなく、立ち去るわけでもなく。ただ、じっとこちらを見つめているのが背中では感じられた。

ええい、うっとおしい。

「俺は、女じゃないですよ。」

「そりゃ、見りゃな。お前見て、女だと思うようじゃ、だいぶ焼き

が回ってる。」

立ち上がろうともしない「彼」の淡白な返事に、ごもつとも言いたげに男は返事をした。

「お前、入隊したての頃に、兵士を一人殺しかけたって？」

「・・・そんな、ひどいことしてないですよ。今頃はきっとピンシャンしてますよ。」

「何をした？」

「貴方に関係ないでしょう？」

洗っても落ちない血のしみと格闘するように白い包帯を洗濯板に叩きつける。

相手は、まあ、関係ないけどな。とつぶやいた。

「“病院”は基本的に行きっぱなし、だったと思ってたもんでね。病院にいつて戻ってきた奴がいるって聞いて、誰だそれ、と思ったわけだ。」

「ちと趣味の悪い幻覚を見せただけです。・・・少々、加減を間違えて、二月ほど頭をイカレさせてしまいました。それでも、今頃はすっかり元通りになって前線復帰してるはずですよ。ほんの脅しのつもりでしたから、後々影響が残るような魔法をかけたつもりはありません。それが今頃問題になりましたか？　だとしたら、御処断は好きにどうぞ。」

そっけなく答えて、洗物を続ける。近くの木の下に寄りかかり、腕組みをする男はじろじろと無遠慮に見つめた。

「どうして、そんなことになったんだ？」

「無理やり、俺のこと如何こうしようとしたので。ここの連中とき

たら、男女の区別も付かなくなってるんですかね。俺がひよろつとしたガキだから、力づくで好きにできると思ったんじゃないですか、すぐに後悔したようですが。」

「なるほど、“魔女”と呼ばれるわけだな。」

む、と顔をしかめて、彼は再び淡々と洗物を進めていく。

「お前、此処に来る前は何をしてたんだ？」

「答える義務は無いでしょう。」

「無いけどな。」

その瞬間、気配が動く。

包帯が、いくつか空を舞う。

「……ふん。」

空振りに終わった剣を鞘に戻し、男はふっと笑みをこぼした。

「……いきなり、乱暴ですね。」

大空につま先を向けて、先ほどの一閃をやり過ごした少年は、逆さのまま兵士をにらむ。

「これはまた随分身軽だな。そうか、お前、精神操作系の魔法も使えるのか。……ところで、此処に来る前は？」

「答える義務はありません。貴方は俺の上官じゃないんですし。」

すとい、と地面に降り立った少年は散らばった包帯を集め始める。

「仕事の邪魔しないでくださいよ。・・・洗いなおさなきゃ。」

「手伝ってやろうか。」

「いいですよ。放って置いてください。・・・貴方、暇なんですか？」

いらだたしげに兵士を一瞥した少年に、兵士はいいや、と首を振る。

「じゃあ、何しにきたんですか。」

「今日のところは帰るよ。」

兵士は、軽く笑みをみせ、手を上げた。

「またな。“傭兵”。」



またな、といった兵士は、次の日ひよつこりと現れた。

医官に話があるといって別室でなにやらひそひそと話を始めた。

昨日の今日で何の話だろうか、さすがに少年も気にしたが、傷病兵たちに振り回され、あわただしくすごしているうちに綺麗に忘れていた。

いつもの仕事が一と段落ついたところで医官に呼びつけられた少年は、兵士についていくようにと告げられた。

「その方の手伝いをしてこい。」

一体何をさせられるんだろうと彼は首を傾げたが、医官に言われた以上否といえる立場にはないので大人しく付いていった。

ついていった先は、部隊駐屯地のはずれの建物である。掘っ立て小屋のような、粗末なものであった。

その中に入ると、椅子に座らせられ、後ろ手に縛られた兵士が、うなだれた様子で肩を落としている。

相当に、消耗しているのが見て取れた。

「・・・誰ですか？」

「最近捕虜になった奴でな。そこそこ情報を持っていそうな様子なんだが、これがどうして。口を割らない。」

見れば、頬や首に蚯蚓腫れのような赤い筋が見える。

少年は、はあ、と興味なさそうな表情で息をついた。

「拷問でもしましたか。」

「まあな。・・・お前なら、どうする？」

手伝え、とは、どうやら捕虜の口を割らせろ、ということらしい。

彼は、一瞬眉間に皺を寄せたあと、すぐに興味のなさそうな顔にもどした。

「誰かに質問させてみるというかもしれませんが。大した訓練を受けてない人でしたら、言葉にしくなくとも、一瞬だけ、頭に思い浮かべるものですから。そこを読み取ればいい。」

「ほう。・・・では、訓練を受けていたら？」

「そうですね・・・。自然と口を割るように“自白”の魔法か。それでも抵抗するようなら、少々荒っぽいですが、頭の中を引っ掻き回して、“嫌なものを見ていただく”しかないですね。精神に無理やり進入して抵抗する気力をなくさせるためのものですから、やりすぎると“ここだけ”駄目になりますので加減は必要です。」

そういうながら、こめかみを叩いた少年に、兵士はそうか、と頷いた。

「それでも、無理なら？」

「それ以上の方法は知りません。他をあたってください。そもそも、俺がこの手の魔法を覚えたのは“誰かに使う”ためではないのですし。」

「へえ。何故だ？」

一瞬、いいよども。

彼は、肩で息をついた。

「ガキの頃から、少し情緒が不安定で。精神状態が悪いと魔力の制御が上手くいきませんでしたから。感情的になると力が暴れたりするので、“精神の構造を知りなさい”ということで勉強させられました。」

「そうか。」

兵士は、少年と捕虜を一瞥ずつしたあと、少年に向かってあごをしゃくった。

「誰かに質問させるから。やってみろ。」



その捕虜は、あっさりと“思い出して”くれたので、苦労はなかった。

拍子抜けすら覚えて、二刻もすれば、少年はまたもとの病院へと戻っていった。

「最初からそうしておけば、お互い苦労は無かったなあ。どうしたものかと思っていたときに、歩兵の間でうわさになっているの思い出したんだ。ひよっとしたら、そういう系統の魔法を知っているかもしれないと思ってな。助かったよ。」

「はあ。」

のんびりとした口調の兵士に、少年は曖昧な返事をして眉根を寄せた。

もう用は無いですよ。とだけ言って、彼は足を速める。

「一人で戻れますから。ここで失礼します。」

「お前、俺の所にこないか？」

思いがけない言葉に、一度振り向いた少年は、また背を向けた。

「……俺は、兵士としての訓練を受けたことはありません。今後そのつもりも無いです。」

「普通の兵士の働きを期待しているわけじゃない。お前は身軽だし。精神操作系の魔法もたしなむ。使い道はいくらでもある。俺としては“あの病院”に置いておくには惜しいな。」

少年はうつとおしそうにため息をついた。

「面倒くさいの、嫌なんです。それに、あの類の魔法は多用したくありません。結構負担なんですよ。」

「こんな所で、半分死人のような顔でいるよりはいいだろう。待遇も格段によくなるし、第一、自由だ。なあ“前払いの傭兵”さんよ。」

その瞬間、風も無いのに、ざわり、と木々が揺れた。

「へえ、怒るとそうなるのか。確かに魔力の無い俺でも鳥肌がたつ程度にはわかるぞ。」

こぶしを堅く握り締めて、少年は、無言のまま振り返り、兵士をにらむ。

その表情を面白そうに眺めて兵士は目を細め、自身ありげに腕を組んだ。

「この状態から解放されるのに必要な金なら、俺が出してやる。返す必要は無い。まあ、俺との“契約金”だと思え。」

「俺は、その代わりに、貴方の手足となれ、と？ 結局、金の出所が代わっただけじゃないですか。俺は結局、“傭兵”という名の奴隷に過ぎない。」

「じゃあ、このまま。何時出れるとも知れないこの場所で、野垂れ死にでもするか？ お前、此処が何処だか知らんのだろう？ “支払い済みの傭兵”は皆そうだからな。逃げようにも、逃げられん。戦は、何時終わるとも知れない。終わったところで、そのまま放られてしまうだけだ。・・・少なくとも、まともに生きてはいけくないな。」

それとも。と兵士はにやりとわらう。

「己の腕に命をかけてみるか？」

・・・どこかで、聞いたような台詞だな。

少年は、急に冷え始めた頭の中でそんなことを考えていた。

流されている、と確実に思う。

俺は、この何処だかわらない国に、このどこだかわからない軍に、命を奉ずる義務も無ければ義理もない。

第一、戦になんて関わるのは嫌だ。

急に、思い出すのは、小さな肩の老いた姿。

きっと、失望させるに違いない。

おそらく、もう目もあわせてくれないはずだ。

・・・およそ、先生達の思う「正しい生き方」じゃないからな。

だが、仕方が無い。こうなったら、濁流でも泥流でもなんでもいい。流されてやろう。

とどまって、腐るくらいなら。

院長先生、申し訳ありません。

こぶしの力が、少し、緩む。

「……俺を自由に、してくれますか。」

「無論だ。正式な“配下”として処遇してやる。俸給もある。身分も保証できる。今から上官に話つけてやるから。明日から来い。」

兵士の顔が満足げに頷いた。少年は、やや青い顔で暫く兵士を見つめ、小さく息をついた。

「わかりました。」

「俺の名前は、サミュエル。サムでいいぞ。お前、名前は？」

その名前に、彼は顔を上げた。一瞬だけ、顔色を変えた後、表情をもどす。

「リオンです。」

「りお。。ちと言いにくいな。それになんか古臭いし。レオでいいか？」

「お好きにどうぞ。」

「そうか、お前の訛りだと、おれは“ザムエル”のほうがいやすいのか？ そっちでもいいぞ？」

その言葉に、即答で彼は首を振った。

「いえ、大丈夫です。サム様。……ご厄介になります。」

第11話（前書き）

若年者には不適切な内容が含まれている可能性があります。自己責任でご覧ください。

第11話

——少々、質問をさせてください

嫌だ、と相手が抵抗する。

——はあ、まあ、最初はそんなトコでしょうね。

ぞわりと、何かが相手の腕に這う。

——貴方のお仲間も最初は嫌がったんですね。

ぞわり、ぞわりと血の中に別の生き物を放り込む。

——「それ」って、いろいろ喰い散らかすのがすきなんですよ。特に、この辺。

うわああと声が聞こえた。頭の芯あたりに、何かが動き始めていることを確信し、淡々と言葉をつむぐ。

——ここで、手を打ちませんか？

嫌だ、となお抵抗する相手に、さらに緑碧の瞳が動いた。

——こちらとしても、あまり手荒なことはしたくないんですよ。

仕方がないかな。というつぶやきと、相手の金切り声は同時であ

った。

わかった、という言葉が途切れ途切れに聞こえた頃、「それ」は
ようやく動きをとめた。

——「ご協力」、感謝いたしますよ

口元が、薄く開く。

——貴方に、“神の御加護があらんことを”



やや疲れた表情のレオの姿を確認して、騎士は顔を上げた。

「レオ、何かわかったか？」

「いろいろ、しゃべっていたいただきました。すこし、荒っぽいこと
しましたが。」

それはご苦労だったな。青い顔色の兵士にそう声をかけると、目
の前の机に紙束が置かれた。

「詳しくはこれで。」

「うむ・・・、今日はもう良いぞ。気晴らしに街にでも出てはどうだ？」

「いえ、まだ書類の整理があるので。」

首を振ったレオを、一瞥すると、サミュエルは報告書に目を落としながら駄目だと告げる。

「お前、どこの駐屯地でも敷地から一步も外に出ないじゃないか。第一顔色が悪い。すこし休んできた方が良いぞ。これは命令だ。」

「・・・了解しました。」

命令と言われれば、致し方ない。

落ち着いた声を残し、レオは部屋を出た。

そのまま、兵舎の外へ出る。

「はー・・・。」

顔の半分を手で覆い、大きなため息をついて、彼は空を見上げた。

「もう夕方近いじゃないか。あの人一人に結構てこずったなあ。」

自分を中心に、ぐると囲む天球が、深い青から淡い茜色へグラデーションを作っている。

レオは、茜色の空を見上げ、ひとつ大きく伸びをした。

・・・そんなに、顔色が悪く見えたのだろうか。

レオは、自らの頬に軽く触れ、首をかしげた。

サミュエルは、情報収集の部隊を率いる立場にある。いくつかの駐屯地を回りながら現地の状況を確認したり、敵地の探索や情勢を掴むために動いている。そこで、レオは捕虜から情報を聞き出す仕事を手伝っていた。その実、“手伝う”などと生易しいものではなかったが。

それでも、待遇は良かった。衣服も食料も十分に与えられ、おまけに俸給まであった。それまでの扱いとは雲泥の差があった。

栄養状態がよくなったためか、レオの身長が急に伸び始め、ひょろりとした手足はやや細いながらも武骨さが増し、かつての中性的な印象が影をひそめ、青みがかった緑色の瞳は切れた眦と共に涼しげな印象を周囲に与える。

奴隷同然のレオを解放し、自らの手下としたサミュエルは、周囲の者の話によれば、とある貴族に仕える騎士らしい。わずかながら領地も持っているという話だが、レオにはさして興味も無い話であったので、彼の主君が誰かなどと細かいことまでは聞かなかった。もっとも。そのときに事細かに説明しようと身を乗り出してきた一人の従士の話の腰を折って、「俺、興味ないから」と片付けてしまったはずだったかもしれない。いつもそっけない態度で、部隊の中でも微妙に浮いた存在となってしまうている自分がいやおうなしに自覚できた。

だが、「長いこと世話になるわけでもないし」、とたかをくくって、その関係性の修復を図ったことはまるでない。

彼の配下の中には“当家にはふさわしくないのでは？”と言い出す者も居るが、サミュエルは気にすることも無く、レオを“当家付きの兵士”にして置いてくれた。

しかし、まあ、なんというか。東方王国の軍にまぎれてたなんてなあ。

よくよく聞けば、レオが紛れ込んでいたのは、目標としている東方王国の軍だったのはなんという奇遇なのか。

東方王国に居る友人を訪ねる途中であった、と説明したら、サミユエルは落ち着いたら、連絡を取れるように計らってやろうといってくれた。

戦が落ち着けば、と思っているうちにあっという間に1年もたつてしまった、とこういうわけである。

レオは、やがて18歳になろうとしていた。

しかし、今更“侯爵”の名前なんてだせないよ。身分違いすぎて。言ったところで信じてもらえそうもないし。

今の自分の境遇で、そんなこと言えるはずも無い。修道院の話を持ち出しても、それを誰が信じてくれるのか。証明のしようも無い。そんな自分の立場を理解するに付け、いつしか、かの銀髪の友人を雲の上の人の話にしてしまった。自然、貴族連中の噂話など端から耳に入れなくなっていた。

「折角だし。街行ってみようかな。」

レオは、鈍い重みを訴える頭を軽く叩き、歩きだしたところで背中が声がかけられた。

「レオ、何処に行くのかー？」

声の方向に振り向けば、同じ所属の兵士が軽く手を挙げた。この二人とは兵舎でも同部屋だ。レオは、はい、と頷ぐ。

「サム様からすこし暇をもらったので、街を見てきます。」

「なんだよ、一人で街に行く気かあ？」

「少しまってるよ。俺たちがイイトコつれてってやるぜえ？」

どんなところに連れて行かれるか、大方想像がつく。嫌です、とすげなく断りの返事を口にしかけたが。

慣れない街で一人は危ないかもしれない。

レオは思いなおした。

「はい、連れてってください。」

「ほえっ？」

「め、珍しいー。」

いつものそっけない態度からてっきり断られるものと、からかい半分の言葉をかけた兵士達は驚きの声をあげる。

恐る恐る、兵士はレオンの顔を窺うように見る。

「お、おい。お前、俺たちが何処に行くか、大体分かるよな？」
「わかりますよ。綺麗なお姉さんがいるところでしょ？ 子供じ

やないんですから、わかってますよ。」

ここは最前線というわけではないが、少し離れた補給の中継点だ。市街地からは少し遠くに位置している。

駐屯地が出来た頃から、それに当て込んで商売をしようと近くに花街が出来、さらにそこから市が立ったりする内にいつの間にか小さな町らしい地域ができあがっていた。

大体、わかっているという若い兵士のセリフに、若干年上の兵士二人は顔を見合わせ、こほんと咳払いをした。

「わ、わかってんなら、いいけどよ。」

「なんでえ、お前、興味があるならもっと早く言えよ。お前、いつもツンケンしててそっけないし。駐屯地から一歩も出てる様子がなから、誘っても無駄だって思ってたんだよ。」

「出かける用事も理由もなかったから出なかっただけです。街に出るといっても、特にあてもありませんし。どうせなら、慣れている方について行く方が得策かなと。」

相変わずそっけない返事のレオに、だが兵士たちはにやにやと笑みを見せながら肩をたたく。

「ま、なにはともあれ、行きますか。」

「一回、お前とはじっくりしゃべってみたかったんだよなあ。魔法使って言っても、実際の仕事の様子は見たことがないし、食事時も一人で黙って食って知らないうちに食堂から出てるし。大体、このほそっこい体つきじゃ剣もまともに振れねえだろうから、一体どういうガキだろうって皆噂してたんだよ。」

その人懐っこい笑みを一瞥し、レオは軽くため息をついた。

「元“前払いの傭兵”の俺にそんなに興味津津だとは思いませんでしたよ。何処の馬の骨だかわからないし、第一、東方王国生まれじゃない俺は信用ならないって人が大半だと思っていました。」

「まあ、そういうなって。」

「こそ、そういうのは酒で流そうぜ？」

随分調子のいいことだ。つい先日まで、遠巻きに見ていたくせに。

レオは内心呆れはしたが、おそらくは己の他を寄せ付けない態度が要因なのだろうと思いなおし、それ以上厭味を言うのをやめ、屈強な肩を揺らして歩く兵士の後について歩き出した。

第12話

連れていかれたところは、いかにもなたたずまいの酒場である。強い酒の匂いに混じって、白粉や香油といった香りが充満し、胸やけを起こしそうな気がする。

何処となく、淫靡な雰囲気のためよう店内に入り、案内されたテーブルに着くとさっそく兵士は酒と其れにあう料理を注文した。

「ここには良く来るんですか？」

珍しそうに、店内を見回したレオがそう尋ねると、兵士の一人がまあなあと頬杖をついた。

「週一、ってところかな。」

「酒飲むだけでもいいし、別の目的があってもいい。酒はまあまあ、料理はここらあたりでは一等うまい。酌婦は美人で愛想が良いと来た。」

「ああら。お兄さん。いらっしゃいな。」

急に化粧臭さが鼻につく。レオの向い側に座る兵士の首に腕をかためて、女が声をかけてきた。

「よお。」

「最近顔見ないから、うつかり戦死でもしたかと思ってたわ。」

「そりゃあ、冷たいなあ。寂しいって言うてくれればいいのに。」

「そういうのはもう少しお金落としてくれる相手に取っておくわ。あら・・お連れ様、見ない顔ね。」

「そうだ。こいつ、こういうところ、来たことないって言うからさ。それじゃあ、ひとつ俺たちが大人の世界ってのを見せてやるかと、こういうわけよ。」

調子よく返事をした兵士から離れ、女はするりと衣ずれの音を立ててレオに近づく。

「若い兵士さん。いらっしやい。」

そろりと白魚のような指がレオの顎の骨をなでる。挑発的に紅い唇が少しだけ開いて白い歯をのぞかせる。

「可愛い顔してるのね。」

頬に触れられても、顔を赤くもせず、さりとして嫌がりもしないレオは、続いて薄く口の端を引いて笑みを見せた。

「ありがとう。」

その笑みに、女はしばし目を瞬かせ、すぐさま取り繕うように笑みを返し、手を離れた。

「じゃ、じゃあ、ごゆっくりね。」

そのやり取りに、兵士二人はきょとんと眼を見張る。

「お前、案外女慣れしてるんだな。」

「てつきり、舞い上がるかと思ったが。相も変わらずの澄まし顔かよ。」

面白くないとでも言いたげな表情に、レオは口の端をややつり上げる。

「適当に煽って、あとで皆に言いふらして笑い者にしようと思っただんでしょう？」

「・・・かわいくねえなあ。」

「お前、ほんとヒネてるんだな。」

むっとした表情の兵士の酒器に、届いたばかりの酒瓶を傾けて二つ杯を満たし、兵士に渡した。

「・・・。」

続いて自分の杯に少しだけ酒を入れながらレオは淡々とした口調

で続けた。

「昔、旅芸人一座に世話になってたんです。踊り子が大勢いたの
で、女性にからかわれるのは馴れています。」

「へえー。初耳。」

「そりゃあ、うらやましいなあ。よりどりみどるかよ。」

あまり品の良くない笑みを見せた兵士に、レオは意地悪そうに片
方の眉をつり上げる。

「真実は永遠に闇の中に入れとくもんです。騙されているうちが
一番幸せですよ？」

「ほんと、可愛くねえガキ。」

興を削がれたと言わんばかりに鼻の頭にしわを寄せた兵士の一人
の肩をたたき、もう一人の男はそれでいいんだとおと酒をあおる。

「俺あ、騙されてていいんだ。何時死ぬかもしれねえし。上手く
だましてくれる女が一番いい女だよ。」

この男。見かけほど強くはないらしい。

自分の杯に注いだ酒を少し舐めて、レオはふと視線を感じて顔を
あげた。

先ほどの女と、他数人の女が酒瓶を手に嫣然として立っている。

「いらっしやいませえ。」

「この坊や、今日初めてここに来たんですって。」

「本当可愛いわねえ。」

「なんだよ、レオ目当てかあ？」

兵士の声が途端に不機嫌そうになる。そんなこと言わないで、先ほどの女がなだめた

「新顔さんにウチのコ達でご挨拶したいって言うからさ、連れてきたのよ。そんな顔しないで頂戴な。常連さんあつての新顔さんだもの。いつも来てくれるお二人さんのおかげよ。」

「ってなこと言ってる。若くて顔の良いの連れてきたからちやほやしてるんだろ。」

兵士の二人に先ほどの女ともう一人が手近な椅子を持ちこんで座り、酌をしながら話を始めている。

女の一人がレオの杯に酒を注いだ。

「ようこそ。楽しんで行ってるね。レオって呼ばれているの？」

「ええ。」

「兵隊さん？・・にしてはなんだか雰囲気が違うのね。ここ、座って良い？」

「どうぞ。」

女が隣に座り、化粧品の香りが鼻孔をかすめた。女はしげしげと無遠慮にレオを眺める。

「あたし、こんな華奢な兵隊さんって見たことないかも。それに、なんだかとっても良い声ね。」

「こいつは特別だ。魔法使いだからな。」

「あ・・おいつ。」

とがめるように軽く睨みつけたレオに兵士は軽く手を振る。

「この程度でわかるか。ピリピリするなよ。」

「軽はずみな事言わないでくださいよ、もう・・・。」

「へえ、魔法使えるの？ 何かやって見せてよ。」

「見せられるものはないですよ。」

そっけない返事と共に軽く杯を傾ける。年上らしい女が軽くたしなめた。

「こら、無理なお願いしちゃだめよ。」

「はあい。・・あら、ねえ、始まるわよ。」

女の声と同時に軽やかな音楽が始まる。

きらびやかな衣装に身を包んだ踊り子たちがしなやかに舞う。

二人の兵士も、前方を見やり、感嘆の声をあげる。

「おっ。」

「やっぱり、ここは最高だな。」

「でしょお？」

兵士と女の会話は弾んでいく。

そのきらびやかな様子に反して。
レオは真顔になる。

カテジナはどうしているのか。

他の姐さん達は？

無事なのか。

一体、どんな生活をしているのか。

「レオ、どうしたあ？」

「面白くないか？」

急に名を呼ばれ、レオは我に返った。

「あ……いいえ、なんか、すごいなって。」

慌てて、にこやかに笑みをみせる。

兵士は、ホッとしたような表情を見せた。

「嫌だった言えよ？ サム様からも無理強いするなって言われてるしさ。」

「おい、アマデオ。やめないか。」

一人の兵士の言葉に、もう一人が焦ったような声で制する。

レオは、聞き逃さなかった。

「……どうしてそこでサム様の名前が出るんですか。」

「お前なー。言うなって、そういう野暮は。」

「だってよ……。俺、黙ってるの苦手なんだよ。」

気配を上手く飲み込んだ女達はいつの間にか席をはずしている。

互いに目を見合わせた兵士は、しばし迷った後、ぼそぼそと言いはじめた。

「サム様からよ。お前の事頼まれちゃって。」

「頼まれる筋合いはないかと思いますが。」

「ほら、こういう事言う奴だから黙って付き合ってやれって言われ

ただろう？」

軽く睨むような表情のレオに、悪いと肩をすくめてアマデオという名の兵士が続ける。

「だってさー・・なんかフェアじゃねえって気がするしさ。」

そこで、窺うように二人はレオを見つめる。

「やっぱ、悪い悪くしたよな？」

「けど、俺達、サム様の命令だからってお前の事誘ったわけじゃないからな？ 前から気になってはいたんだよ。初めて見た時は、ほんと、“大丈夫か？こいつ”ってくらいやつれてて、周囲が皆敵みたいな面でじっと睨んでたしさ。誰が何言っても最低限度の言葉しか返さないし。・・・よっぱど嫌な目にあってたんだろうなーって位は想像がついたけどさ。」

「仕事してるとこは見たことないけど、顔色悪い事あるし。時々夜中うなされてるみたいだし。俺達一回サム様に聞いたんだよ、どういうやり方をしているのかはわからないけど、なんか無理やり自分を痛めつけてるように見えるが、本当にいいのかって。そうしたら、“じゃあお前達が少し息抜きさせてやれ”って。“俺が言えれば何でも命令に聞こえるから”ってさ。」

その様子に、レオは、ため息を漏らした。

「・・・良く見てますね。」

「そりゃあ・・・だってなあ。同じ部隊で、同じ部屋だろ？」

「毎日面会わせてりゃ、そりゃあ、な。」

しばらく、黙りこんだあと。

レオは、軽く杯を傾け、空にする。

酒瓶を手に取り、空になったままそれなりに時間のたった相手の杯をそれぞれ満たす。

「・・・こういう所ならいいです。」

「へ？」

「なんて？」

小さなつぶやきに、レオはやや眉根を寄せたあと、はつきりと言う。
う。

「旨い酒と料理の出る店なら、たまには御付き合いさせていただきます、と申しました。何度とも言わせないでください。」

ごとんと酒瓶をおくと、二人を見ないまま、杯をあおる。

その様子に、兵士は、やや呆れた。

「お前、ほんと可愛くない。」

「ひねてんなあ・・・。」

そういうと、兵士二人はやや照れたようににやにやしなから、杯を手にした。

第13話

「レオ、これ頼む。」

「はい。ええと、これは・・・先日の会議資料ですか？」

とある日の事である。

サミュエルの執務室に書類を探しに来たレオの目の間にすると紙束が差し出された。

それを抵抗なく受け取り、レオは内容を確認する。

他の書類にサインをしながら、サミュエルは顔も上げようとしな
いまま返事をした。

「うむ。」

「日付のメモがありませんが。一昨日ですよね？」

「うむ。」

すばやく資料の端にメモ書きし、サミュエルの執務室の棚に、
いつものように書類を挟もうとして。

レオは、ん？と首をかしげた。

「あの。」

「なんだ？」

手元の書類をめくりながら、視線を上げようもしないサミュエルに、やや困惑したようにレオは声をかける。

「俺、捕虜の管理が本来の仕事のはずですが？」

「ん？ そうだな。」

「そうだな、じゃありません。」

ぐるとサミュエルの正面に回ると。机に両の手をついてずいとし身を乗り出し、レオは上官に異議を唱える。

「当たり前のように書類を渡さないで頂けませんか？」

サミュエルはにこやかにさりりと一蹴した。

「お前、何時も俺の書類の整理をやるじゃないか。」

「貴方の机の上がどうしようもないからです。」

そこで、ぶっと噴き出す者がいた。

「・・・セオ。」

「申し訳ありません。サム様。」

サミュエルの声に、従騎士の少年は謝罪の言葉を述べるとなんとか表情を引き締める。

その様子を一瞥し、レオはふうと息をついた。

「だいたい、俺は好きこのんでやっているわけではないんです。此方の必要な資料を訪ねても貴方がすんなり出せないから、探すついでに整理を始めただけです。それをいいことに、最近俺は全部丸投げしてるじゃないですか。」

「その方が、あとあとお前も楽だろう?・・・っと。」

そう返して、手元の懐中時計を目にすると、サミュエルはそういえばとレオを見る。

「この後、なにかなかったか?」

「いちろくまるまる、16時に、作戦会議です。朝言いましたよ?」

そこでまた、渋い顔でサミュエルを見据える。

「で、なんで俺に聞くんですか？」

「いや、お前のほうが俺の行動予定よく把握してるから。」

「行動予定は、俺が捕虜に事情聴取する際に、貴方が立ち会う必要がある場合に備えて、毎日予定を聞いてるだけだったのが、それも毎日聞かれるのは面倒くさいからといって、予定が入るたびに俺にメモさせるようになったのは貴方ですよ？」

ぶぶっとさらに少年が噴き出す。

「・・・セオ。」

「申し訳・・・ありません・・・っ。」

今度は、笑いを抑えるのに時間がかかっているようだ。

サミュエルは、椅子から立ち上がり、上着を手取る。羽織りながらぶつぶつと言いつつ訳じみた事を言う。

「俺は、こういうこまごましたことは好かん。・・・セオ、そろそろ出るから。馬丁に馬の装備をするように・・・」

「すでに整っている頃合いです。レオさんから言われて、手配しておきましたから。」

まだ笑いをかみ殺している少年は澄ました顔でつげる。
やや分が悪くなったサミュエルは、取り繕うように上着の襟を整えた。

「……う、うむ。」

「では、行ってきます。レオさん、御留守番をお願いします。多分、二刻位で戻ります。」

「はい。サム様、セオ様。行ってらっしゃい。」

妙な連携を見せられた後、部下に見送られてサミュエルは馬に乗り、会議のある近隣の駐屯地へと出発する。

しばらく馬を進めて、サミュエルは後方の少年に恨み事を述べる。

「……セオフィラス、笑い過ぎだ。」

「申し訳ありません。サム様に物おじせずああいう事を御話されるのはレオさんくらいですから。見ていて楽しくなっていました。他の方ではそうはいきません。」

「あいつは自分の立場とか身分とか、そういうことはどうでもいい奴だからな。」

「貴族にも兵士にもいないタイプですね。」

「……ふむ。」

急に黙りこんだサミュエルに、少年は首をかしげた。

「サム様？」

「あ……、いや。今日の会議の案件の事を考えていた。」

取り繕うように片手を軽く挙げ、サミュエルは頤に触れながら前を見つめた。

……あいつ、孤児院を兼ねた修道院育ちで旅芸人だったと言っていたが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2015n/>

流浪の民

2011年11月12日21時25分発行